
G海軍航空隊

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G 海軍航空隊

【Nコード】

N9303Y

【作者名】

タゴサク

【あらすじ】

オレは・・・。

確か死んだはずでは？

オレは田中実と言う人間だった。

何故・・・Gになってるのだ？

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてませんが、現実歴史とは違う世界となっています。

オレはGだ。(前書き)

オレは・・・。

確か死んだはずでは？

オレは田中実と言う人間だった。

何故・・・G田になってるのだ？

オレはGだ。

オレは・・・。

確か死んだはずでは？

オレは田中実と言う人間だった。

趣味は戦記モノを読む事。

最近は減ったが異世界乱入モノも好きだった。

そんなオレが仕事帰りに一杯飲んで、フラフラと歩いてたら・・・。

目の前にダンブが・・・。。。

「アツ、オレ、オワタ・・・。」

そう思って当然だろう。

身体に強い衝撃を感じたのが田中実としての最後だったろう。

そのオレがどうして・・・。

「G田、総員起こしだぞ。タラタラしてたら指導教官に殴られるぞ。」
G田実となつてたのだ。

ここは広島の田舎にある海軍兵学校。

オレはその中の海兵52期生徒として、ここに在籍してる。
時は1925年。

同期の柴田武雄も今は仲が良い。今は・・・だがな。
未来では彼とオレは対立してしまうのだ。

このG田と言う男は某43航空隊を指揮したり派手な経歴ばかり目立つが、

実態は「航空素人」だ。

少なくともオレはそう思ってる。

あの零戦が最後までコキ使われる原因となつたのも、
コイツみたいな無能が中枢を占めてたからだ。

零戦の設計時にも散々な事をしてくれ、
おかげで大戦末期には特攻爆弾となつてしまったのもコイツが悪い。
少なくともオレはそう思ってる。

大体未来の航空機がマツハとなるのも想像出来ない人間だもんな。

余談だが、戦時中最高の艦載機はオレはグラマンF4Fだと考える。

小さい飛行機だが凡庸性も高く、簡易空母でも運用可能。

そしてコンパクトに畳めるあの翼。

アレがあれば……。

急増空母でも簡単に運用出来、対潜哨戒でも大活躍しただろう。

さて、もうすぐ我々はこの兵学校を卒業し、遠洋航海に出る事になる。つて。

後年、柴田と揉めなかったためにも彼とは親友になっておかないとな。

何せ数々のエースが彼を信頼してたのは有名な話だ。

G田は某43航空隊のみだし……。

「柴田、オレはこの航海が終わったら航空の道へ進もうと考えてるのだ。」

「G田、お前もか？」

オレも航空隊に入るつもりだ。」

「オレは戦闘機部隊に入りたいと思う。」

未来は絶対に戦闘機が軍隊の先端となるからな。」

「どうしてだ？」

「考えても見る。」

今の飛行機は誕生して二十年も経っていないのに、既に戦争兵器として大活躍してる。

特に戦闘機の性能向上は予想も出来ない程だ。

今はグルグル回るだけの格闘戦ばかりしてるが、

将来は爆撃機も偵察もすべて一機種で賄える日が来る。

オレはそう確信してる。

そのためには戦闘機を今のウチに手に入れ、海軍の中枢に育てるべきだと思うのだ。」

「フム……。凄い考えだが……。

確かに飛行機の性能向上は凄いと思う。

フワフワと飛ぶだけだった飛行機が、

ここまで性能が上がるとはライト兄弟も予想してなかったらう。

先の大戦では完全に戦争の末路も決めたとしな。」

「それにだ。

今は馬力が無くて頼りないかも知れぬが、

戦闘機のパワーが上がれば手の届かない超高空にも駆け上げれる。

速度も上がる。

パワーがあれば出来ない事は無くなるぞ。

パワーがあれば燃料も多く搭載出来るから、航続距離も伸ばせる。

そして、爆撃にも重い爆弾を抱えられる。

戦闘機だから爆弾を捨てたら敵機にも歯向かえれる。

爆撃機では出来ない芸当だぞ。

これなら護衛ナシでも敵陣深く侵入可能になると思わないか？」

「凄い。

確かに馬力が上がれば重い爆弾も抱えられるし、高い空も飛べる。

何よりも速度も上がるな。」

「柴田、オレと一緒に航空隊の未来を開発しようぜ。」

「G田、オレも戦闘機に乗るぞ。」

若い彼等が熱い話をしてるのを影から高野五十六が覗いてたのを彼等は知らない。

「フフフフ。素晴らしい話だ。

確かに馬力が上がればあの頼りない飛行機も活用可能となるな・・・
帰国したら彼等を早速航空の道へ引き入れないと・・・」

G田となった田中は柴田との交遊の道を得て、
未来の険悪な関係とは途絶する事になった。

（ヨッシャ！！）

これで坂井センセや未来の部下から輦蹙買わずに済むぞ。
零戦も絶対に馬力中心で活用させないと。

オレの持つ未来の戦闘機のデザインも各航空機会社に渡さないとい・・・
！）

G田実となった田中実は心で未来の海軍航空隊を画いてた。

オレはGだ。(後書き)

本作の主人公は後年、嫌われたりルメイを表彰したりG田艦隊と陰口を

叩かれたアノ人ではありません。

多分・・・。

後年、某エースから嫌われたり、
戦闘機無用論を提唱した人物とは一切関わりはありません。

多分・・・。

なをこの作品は完全に趣味に走りますので、実在の兵器や歴史とは全くリンクしません。

山本五十六も高野五十六として旧姓で出します。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてませんが、現実歴史とは違う世界となっています。

今日も飛ぶ飛ぶうう。(前書き)

いよいよ霞ヶ浦です。

今日も飛ぶ飛ぶうう。

命惜しまぬ予科練のおお、ななつボタンは桜に錨。
今日も飛ぶ飛ぶうう。。。

やあ、オレはG田となった元、太田実だ。

ようやく遠洋航海も終わり、士官パイロット候補生として霞ヶ浦に
来た。

時は1927年（昭和二年）。

柴田と共に、いよいよ俺達は霞ヶ浦で航空実習を受ける事になった。
余談だが、兵学校出身の教官と兵上がりの下士官では呼び方が違う
のだ。

士官は教官、下士官だと助教と言う具合にな。
テクニクは間違いなく下士官が良いのに何故??

オレが海軍を仕切れる立場になったら、絶対にこの制度は変える。
学校を出たばかりのオレ達みたいなボンボンが
歴戦のパイロットを率いるなんて冗談では無い。

「柴田、今のパイロットの育成制度をどう思う?」

「ん???どつって??」

「おかしいと思わないか?」

まだ素人のオレ達が分隊士とか呼ばれ、歴戦のパイロットである下

士官搭乗員を

アゴでコキ使ってる状況だよ。」

「確かにな。

オレ達みたいな素人が歴戦のパイロットを使えるのもおかしい。

どうなってるのだ??」

「恐らく古くからの悪いしきたりが今も続いているのだろう。
特にパイロットでは絶対に修正すべき制度だ。」

「そうだな。歴戦のパイロットをムダに死なすかも知れないしな。」

「ウム。そのためにもオレ達だけでも彼等の信頼を得ておくべきだ。」

「ああ、未来の部下でもあるしね。」

士官待機室でオレ達は話し合ってたが、オレ達の話を他の士官は全く聞いていなかった。

そして三式初步練習機の前部シートに座り、後席の助教の下士官パイロットから指導を受けてた。

「G田少尉、宜しくお願いします。」

黒岩一空曹と申します。」

古参パイロットの黒岩紀雄がオレの指導教官だった。

「黒岩一空曹、G田少尉です。宜しくご指導お願いします。」

「し、少尉……。私如きに丁寧な挨拶など不要ですよ。」

「とんでもない事です。
空を飛ぶ事に関しては私はド素人。
プロの貴方に教わるのですから、キチンと挨拶だけでもしておくの
は当然でしょう。」

黒岩はビックリしてた。

大半の・・・と言うか、

士官候補生の連中は下士官には呼び捨てで、どこのバカ殿かよ？と
言いたくなる連中ばかり。

逆らっても彼等の方が階級も上。

間違っても彼等を批判すれば昇任も阻害されてしまうのである。
飛行時間が既に二千時間を越えてる黒岩にしても同じであった。

それなのにこのG田と言う少尉は・・・。

下士官の自分にキチンと挨拶やお礼を言う。

コレが兵士なら当然なのだが、仮にも士官だ。

未熟でも士官。

その士官から挨拶を受けるとは・・・。

黒岩は感動してた。

「G田少尉、ありがとうございます。この黒岩、G田少尉のために
も誠心誠意を持ち、
持てる技術はすべてお伝え致します。」

「黒岩一空曹、宜しくお願いします。」

それと訓練が終わった後で構いません。

滑走路脇で助教の皆様を集めて頂けませんか？」

黒岩はそら来たと思った。

我々を修正する気だろう。」

だが来いと言われたら例え親の葬式でも集まらないといけないのが
軍隊だ。

「分かりました。1700以後なら大丈夫です。
全助教を集めておきます。」

「緊張しなくても大丈夫ですよ。
親交を深めたいだけです。それと色々と言われたいと思っ
たいと思ってるのです。」

酒補や隊内だと色々と言われると思いましたが。」

修正を覚悟してた黒岩だったが、G田の話にはビックリさせられて
た。

親睦を深めたいだけ??
今までの士官候補生だと、我々を見かけたらバカにするか、殴るだ
け。
それが。。

「G田少尉、全パイロット(下士官兵)を集めておきます。
我々の持てる知識や技術はすべて話します。
宜しく願います。」

「コチラこそ。。。
そろそろ発進しないと。。。」

「オッ、後がつかえてますね。では、富士山、筑波山八の字飛行発
進。」

私が最初は操縦しますので、手足は離してください。」

「了解です。黒岩一空曹。」

やがて三式初歩練習機はスルスルと滑走を始め、フワリと霞ヶ浦の空に舞い上がった。

（柴田も同じ事を頼んでるだろうな・・・。）

G田は僅かずつでも下士官兵と交流を持ち、
彼等の親交を得て後の海軍航空隊の要とするつもりだったのだ。
パイロットの大半は下士官なのだからな。

G田と柴田は共に下士官との交流を持ち、一日でも早く技術の習得。
そして海軍航空隊の発展を進捗するのだ。

今日も飛ぶ飛ぶうう。(後書き)

ようやく霞ヶ浦です。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしていますが、現実歴史とは違う世界となっています。

霞ヶ浦（前書き）

まだ訓練途上です。

霞ヶ浦

もう田中です・・・とは言わなくても良いでしょう。

G田です。

現在、霞ヶ浦の滑走路外柵近辺で下士官との親交を深めております。いや、歴戦の搭乗員の方の目って恐いですね。

階級と言う傘が無かったらとても対等には話せないと思います。

「皆さん、こんばんわ。

今度、この霞ヶ浦で初歩訓練を受ける事になりました、G田少尉です。

コチラは同期の柴田武雄少尉です。宜しくお願いします。」

「柴田少尉です。空を飛ぶ事に関しては皆様に教わるしか無い人間です。

宜しくお願いします。

それと・・・

これはホンのお近づきの印です。良かったら皆さんで分けてください。」

オレと柴田は持参した袋を彼等に手渡した。

中身は高級タバコの本マレだ。

酒でも持ち込もうと思ったが、まだ巡検前。

休みならともかく平日にはマズイと思い、タバコを二人で金を出し

合い、彼等に

プレゼントしたのだ。

ワイロとは違うからね。

「G田少尉、柴田少尉、頂いても宜しいのですか？
こんな高級タバコを??」

「もちろんです。皆様には後は指導して貰うのですから。」

そう言うと彼等はワイワイ言いながらホマレを分け合います。パスパと吸い始めた。

そして黒岩一少尉が先陣を切り我々に挨拶を始めた。

「G田少尉、柴田少尉。先任搭乗員を勤めております黒岩です。
お二人の指導は我々が責任を持ち、初歩からキチンと指導致します。」

「黒岩さん、宜しく頼みます。他の皆様も訓練では遠慮無くシゴいてください。」

さすがに外部の目がありますので、飛行中のみをお願いしますけど。」

「そう言うと彼等はワハハハと笑い、「承知しました。」と応えてくれた。」

そして彼等の実戦の話なども聞くと・・・。

「まだ、大戦に出たパイロットは数が殆ど居なく、唯一、上海方面で
独逸と戦ったのが、
黒岩だそうだ。」

ドイツのアルバトロスは中々手強かったとか・・・。

「フム・・・やはり実際に戦った方の話は違いますね。」

「所で皆様にお聞きしたいのですが、将来の我が海軍航空隊には、今のパイロット育成制度で」

間に合うと思いますか？」

彼等はガヤガヤと話し合ってたが・・・。

「G田少尉、コレは内密オフレコでお願い出来るなら話しますが。」

黒岩が代表で自分に話しかけて来たのだ。

「モチロンです。オレと柴田だけの心にとどめておきます。」

「それならお話しします。」

自分は先の大戦で撃墜したドイツのパイロットと話し合いをした経験があります。」

「ほお、興味深いですね・・・。」

「ハイ。現在、世界の戦闘機はドイツ、アメリカ、イギリス、フランスがトップクラスです。」

特にドイツは敗れたとは言え、素晴らしい新鋭機を続々と出しました。

東洋では殆ど戦果も無かったドイツですが、欧州では凄い活躍をしています。」

特に赤男爵レッドバロンと呼ばれた英雄も出てますからね。」

赤男爵レッドバロン>某二輪屋ではありません。>は本名、リヒトフォーヘンと呼ばれる先の大戦最大の英雄だ。

80機以上の撃墜数を誇るエースと呼ばれる英雄だった。残念な事に大戦末期に戦死してしまったが。

「その彼等と色々与会話して分かったのですが、ドイツでは敗戦さ

え無かつたら、
次の世代の戦闘機の開発も出来てただろうとの事です。」

「次の世代の戦闘機??」

「ハイ。翼は低翼単翼。ひたすらパワーを求め高い空を飛べる戦闘爆撃機と呼ばれる機種を開発してたらしいです。」

「興味深い話ですね。」

「そんな飛行機で戦闘任務が出来るのか?と聞くと、彼等はパワーさえあれば可能と

断言していました。今の戦闘形態は二十年以内には滅びると予想もしてました。

ドッグファイトばかり求めては貴重なパイロットの命がいくつつあっても足りないとも。」

フム。。。

オレの計画とも一致する予言だな。

まさかドイツにもオレみたいな転生者が居るのか?

いや、居ると思う方が良い。

何事も想定しておかないと某原発騒ぎみたいな事態が起きたらフリーズしてまうぞ。

特にオレ達は軍隊だ。

常に最悪の事態を想定しておくべき。

備えあれば憂いなしと言うでは無いか。

その後彼等と色々と懇談し、今すぐは不可能だが、出来る限り下士官の優れたパイロットの

昇進を早める制度を上層部に具申すると約束した。

こんな凄腕パイロットが居るのに、素人士官に一番機を任せてた海軍……。

いや……。

日本軍は頭が狂ってたとしか表現が出来ないぞ。

絶対に腕Ⅱ階級にしないとね。

腕のあるパイロットが指揮したら、負け戦でも退却が可能となる。勝てる戦も確実性が増す。

そのためにもオレ達が努力して、彼等を昇進させないとね。

その後、滑走路脇での懇談会はオレ達二人が修業するまで続けられた。

そして彼等とは部隊が違っても話し合う機会を持てた。

何とか一日でも早く具申できる階級にならないとね。

霞ヶ浦（後書き）

G田とは違う生き様となるG田です。

下士官パイロット軽視は日本海軍最大の愚行でした。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしていますが、現実歴史とは違う世界となっています。

G、フチ撒けてまう。(前書き)

いよいよ航空参謀としてGが暗躍を始めます。

G、ブチ撒けてまう。

オッス。

オレはGだぜ。

所でどうしてGと呼んでるか分かるかい？

この世の全女性が大嫌いなGと言う黒光りするアレを連想させるからだよ。

その位、現実のGは大嫌いなんだーい。

まあ、それは置いて置いて・・・。

霞ヶ浦の練習機過程を終えたオレと柴田、淵田は共に戦闘機要員として横須賀に来てた。

時は昭和三年、まだまだ複葉機全盛は続いていた。

下士官なら佐伯とか大村なんだろうが、この頃は横須賀で戦闘機過程を練習させてたのだ。

(実際の歴史とは全然違います。)

何故、パールハーバー攻撃隊の指揮官となる淵田が戦闘機要員に居るかって？

口説いたからだよ。

未来は絶対に戦闘機が海軍のトップに来るからとね。

そのためにも有望な指揮官は近くに居て貰わないと・・・。

「G田、いよいよオレ達も指揮官としての道を歩くんだな。」

「淵田、オレ達は指揮官としてでは無く、参謀として戦闘機隊を指揮するのが目標だ。」

「へたくソなオレ達が空を飛んでも飛行機を壊して減らすだけだろうが。」

「ワハハハ。違い無い。」

「オレ達の仕事は下士官パイロットをいかに育てるか？だな。」

「ウン。それと戦闘機の開発だ。」

「とにかく一日でも早く参謀への道を見つけ、海軍航空隊を育てよう。」

「G田、高野司令がオレ達を呼んでるぞ・・・。」

「お前、司令に何かしたか？」

「イヤ・・・。そもそも司令とは縁も所縁も無いぞ。」

高野司令とは別世界では山本五十六となったアノ人の事だ。

この世界では養子に入らず、高野のままらしい。

日本海海戦でも負傷しなかったらしく、指も五本揃っています。ハイ。

「G田中尉、以下二名、入ります。」

「ウム、入れ・・・。」

「失礼しまああす。」

「初めて会うが、私が横須賀航空隊司令、高野五十六だ。G田くん、柴田くん、淵田くん。まあ座りたまえ。」

司令の指示により、オレ達は椅子に座らせてもらった。

「時にG田くん。キミは霞ヶ浦では中々の好成績を収めてたらしいな。」

「いえ、助教の指導が素晴らしかっただけですよ。彼等の指導でココまで来れました。」

「フム……。時に君達とは会うのは実は二度目なのだよ。」

「と、言いますと？」

「君達とは遠洋航海でも同じ艦に乗ってたのだ。私は。」

「そうでしたか……。」

「まっ、茶飲み話に付き合わせるために君達を呼んだのでは無いから安心したまえ。」

「ハイ。了解しました。」

「あの航海の時、そこに居る柴田クンとキミは面白い話をしてたね？」

ヤバ……。聞かれてたか……

「は、ハイ。」

「未来は戦闘機が中心となるともね。」

「ハイ。その通りです。」

現代の戦闘機を見てたら信じられないとは思いますが、馬力さえ上がれば、

殆どの航空戦闘は戦闘機だけで行える時代が来ると私は確信しています。」

どうせ併行世界だ。

思った事をブチ撒けてしまええええ。

「どうしてそう思うのだ？」

「所で高野司令、貴方は山本家に養子の話が来た事は無かったですか？」

「何故……。その事を他人のキミが????」

高野は動揺してた。

今まで突っ込まれて慌てた彼から我が家の事情を逆に質問されたから。。。

「柴田、淵田、今から途方も無い話をするが発狂してるとは思わないでくれ。」

「お前の話を信じない訳が無いだろう。例え月が落ちて来るとか言

われても、

オレはお前を信じる。」

「オレもだ、G田。」

「ありがとう。柴田、淵田。高野司令、これからの話は内密オフレコでお願いします。」

「フム……。良いだろう。それにしてもキミ達は仲が良いのだね。同期と言えば競争相手でもあるだろうに。」

「未来の海軍航空隊の要となるのが我々三人ですから。仲違いするのは勿体無い事です。」

「そりやまた大きく出たモンだね。どうしてそう思うのだ？」

「司令、絶対に信じられないとは思ってでしょうが

、私は約八十年後の未来から生まれ変わった男です。

名は田中実と言います。

住居は横須賀市 町 番地。

生年月日は昭和五十六年八月十五日です。そして逝年、平成二十年九月十日です。」

「八十年後の未来から生まれ変わった男だと？
しかも・・・平成とは？」

「現人神であらせられる現天皇陛下様がお隠れになった後、現皇太子であらせられる

明仁親王様の時代の称号です。

西暦ですと1989年です。」

「フム……。と言う事は現天皇陛下様はかなり長くご在位されるのだな？」

「ハイ。歴代でもトップクラスの在位期間だったと思います。」

「で、どうしてそんな事を私達に告げる気になったのかね？」

「隠しても意味が無いと思ったからです。」

「どうしてか？」

「司令、今の海軍、陸軍の対立で国力が成長出来ると思いますか？」

「フム……。確かに陸軍と海軍は仲違いし、予算の盗り合いばかりしてるね。」

「その通りです。私の知る世界では、1945年。

つまり昭和二十年の八月15日までその時代が続きます。」

「また具体的な日にちが出て来たね。その日は意味があるのか？」

「モチロンです。その日。」

「日本帝國は滅びるのですから……。」

「帝國が滅びる??？」

「ハイ。」

「日本帝國は欧米連合軍と闘い、数の力に圧倒され日本は完全に廃墟となり敗戦します。」

今のままでは確実に。」

高野は驚いてた。

まさかこんな途方も無い話が出て来るとは思わなかった。単に面白い話をする部下から今後の戦闘機に付いて質問したいだけだったからだ。

しかし私の身内の事情まで知られてるとは・・・。
信じるかどうかは別にしても、聞く価値はあるな・・・。

「フム・・・。ではそのキミの知る話を聞かせてくれるか？
もちろん単純に信じる事は出来ないが。」

「モチロンです。狂人と思われても仕方ない話ですからね。」

さて、この田中実が憑依してるG田実と言う男ですが、私の知る世界では・・・。

柴田、お前とは徹底的に対立してたのだよ。」

「どう言う事だ？G田、いや・・・田中・・・か？」

「G田で良いよ。柴田、お前は十年後の未来では戦闘機部隊の指揮官として前線ばかり

渡り歩く事になってる。淵田は攻撃機隊指揮官だ。

そしてオレ、いやG田は・・・。

空母航空隊参謀として働いてた。

空母部隊の指揮官となるある方が、航空機に無知だったため、G田の指示が一方的に通じ、

後年はG田艦隊と呼ばれる程だった。

だがG田は無能では無いが愚かだったのだ。

戦闘機無用論とか提唱し、貴重な戦闘機搭乗員を削減したり、十二試艦上戦闘機開発に

ムチャな性能を求め発展性の無い戦闘機を作らせてしまった。
柴田との対立は戦後も続き、G田が戦後の空軍となる航空自衛隊に
入隊したら、

オレと同じ釜のメシは二度と喰いたく無いと断り、生涯操縦桿も握
らなかった程だ。」

「フム……。中々凄い話だね。G田君。

そろそろ定時となるが。話の腰を折りたく無い。
キミ達、今から時間は大丈夫かね？」

「『『モチロンです。司令。』』」

「では場所を変えて徹底的にG田君の話を聞く事にしよう。」

そう言うと司令は電話を取り、副官に我々の処遇を指示し我々は司
令と一緒に航空隊近辺にある、
料亭へと向かう事になった。

G、ブチ撒けてまう。(後書き)

G君、ついにブチ撒けてしまいました。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしていますが、現実歴史とは違う世界となっています。

エンジンの音おお（前書き）

いよいよGが動き始めます

エンジンの音おお

エンジンの音、轟轟とおおお。

オッス、Gだぜ。

もうGで良いだろ？

時は昭和四年。

後に名設計技師となる堀越二郎も俺達とほぼ同年代だったのだ。少しビツクラ・・・。

さてオレは今、三菱の大幸工場に来てる。

星型空冷エンジンの工場だが、ここは後年ドラの本拠地となるのだ。今は工場地帯だがな。

今回は未来のハイパワーエンジン開発を具申するために大幸に来た。た。

パワーこそが命よ。

パワーがあれば飛行機は何でも出来る。

重い爆弾でも重武装でも。

そして大量のガソリンも積める。

重装甲も可能だ。

機体のデザインは既に伝えてあるので、後はエンジン・・・だよな。中島にも伝えたが、アチラには栄の詳細を話した。中島知久平が食いついて来たのには大笑いしたぞ。

横須賀のアノ夜はとんでもなく熱い夜となった。

オレは柴田、淵田、そして高野司令と共に一夜を熱く語り合った。

高野司令は陸軍のボケ共から航空部隊を取り上げ、代わりに戦車部隊の充実を確約させると言ってくれた。

海の上を飛べないパイロットなんて日本には不要だもんね。

日本は海に囲まれた国だ。

柴田と淵田はオレの発言に驚きはしたが、オレに付いて来てくれると言ってくれた。

本来のGだと、柴田とは徹底的に対立するのだが、今のGでは対立する理由も無い。

柴田もオレの意見に全面的に賛成してくれたから。

淵田も本来進むべき攻撃隊指揮官の道を蹴り、戦闘機隊参謀として働き始めてくれた。

オレは自分の持つ未来知識と未来の戦闘機、特にここ十年以内に登場する世界の主力戦闘機の詳細をすべて彼等に公開すると約束した。

今は頭の中にしか無いので、まずは正確に図面にしないとね。

中々苦心したが、出来上がったすべての図面を高野司令に渡すと彼は。。。

「凄い。

今までは半信半疑だったが、コレを見たら信じる事も出来る。

Gくん。

キミを私付けの参謀として登用しよう。

他の諸君もだ。」

ヨッシャ、コレで参謀への道が開けたとおお。

高野指令のお墨付きを貰えた俺達は戦闘機参謀の肩書きを付けて貰い、

分散して各地の航空隊、そして航空機製造会社を訪問。

今後の方針の指導に歩き始めた。

当初は彼等から「また甲板士官が庶民を苛めに来たぞ。」と、冷やかな目で見られてたが、今では彼等も私達を信頼してくれてる。

既に三菱、川崎、中島、川西は陸軍では無く海軍を信頼してくれてる。

おかげで陸軍の戦闘機の開発は頓挫し始めてた。作る会社が無かったら、そりゃね・・・。

ついでに言うけど自分は陸軍のパイロットの技術は否定してないよ。特に加藤隊長なんて不世出の名指揮官と今でも思ってる。

ただ陸軍の参謀の大半がヴオケなのよ。Gとタメ張りますね。

ウン。

本来のGはどうもオレがコチラに飛ばされたせいでオレの身体と入れ替わったみたいだ。

気づいたら棺桶なんてね。

恐らく神風特別攻撃隊の勇士の怨念だろう。

ザマーですよ。

ホホホホホ。

戦後も靖国にロクに参拝もせず、ルメイを表彰するわ、ロッキードから裏金を貰ってるわ。

多分ですけどね。

旧帝國海軍最大の裏切り者はGと元台南航空隊の飛行隊長のNだわ。ヤツは鬼の西沢も殺したしね。

彼もゼロ戦を取り上げられなかったら絶対に死んで居ない人間だ。

Nのヤローが西沢の愛機を取り上げたせいで、彼は死んだ。

オレは絶対に名パイロットは大切にするとおお。

そのためにも予科練の制度も今のウチに整備しておかないと。

オレは三菱に頼み込み、十年計画で、とにかくハイパワーエンジンの開発を頼んでた。

「お願いします。」

海軍の未来はハイパワーエンジンの航空機にかかっているのです。ムリは承知です。

失敗も繰り返すとは思いますが、何とか十年以内に二千馬力のエンジンの開発をお願いします。

もちろん最初は千馬力程度で構いません。

ですが、それをテストベッドにして、十八気筒化すれば・・・絶対に二千馬力は達成出来るハズです。」

「G中尉、分かりました。」

失敗を前提にして頂けるなら、

十年以内に二千馬力のエンジンの開発は可能だと思います。ただ・・・」

「モチロン海軍は全面的に支援します。」

ハイオクガスも五年以内には百オクタンを標準化する予定です。そのための製油所も徳山に建築中です。

技術者も帝國大学から優先的に回します。」

「分かりました。それでは、早速取り掛かります。」

進展したら即座に海軍航空本部に連絡します。」

「宜しくお願いします。」

さすが日本の技術者だ。

コチラが誠意を見せればキチンと答えてくれる。目標も明確にしたら達成は可能だろう。

絶対に零戦みたいなムチャな相反する要求はしないからな。
フフフフフ。。。

エンジンの音おお（後書き）

Gが暗躍し、海軍の航空機技術がチート化し始めます。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしていますが、現実歴史とは違う世界となっています。

(閑話) 灰色男(前書き)

某小説に良く出る灰色男の出現です。

(閑話) 灰色男

Gです。

ハイパワーエンジンの開発ですが、周辺機器の開発で苦労しております。

エンジン自体は出来ても、プラグ、ハイテンションコード、パッキン、インジェクションと言う、エンジンを構成するのに必須な周辺機器がわが国は遅れてるのですよ。

コレって十年で出来るのか・・・。

< G君、いや田中君、苦労してる様だね・・・ >

突然、オレの目の前に灰色の男が出現したのだ。

アンタ誰??

< 驚かせてすまないが、私は敵では無い。

君が生前良く読んでたアノ手の小説の異界の人間とも思ってくれ。名前は・・・。

そうだな。灰色男とも呼んで欲しい。 >

やはり出たか・・・。

オレがこんな事してたら、絶対に出ると思ってたが。まあ良い。使えるなら使おう。

どうせ併行世界よ。

灰色男さん、始めまして。

田中改めのGですよ。
所で、もしかして・・・。

< ウム。私が君をこの世界に飛ばせた張本人だ。 >

やはり・・・。

何らかの強い関わりが無い限り、
例え魂でも時代を飛び越えるなんて不可能だからな。
ついでだ。

無いモノを何とか出来ないか頼んで・・・。

< G君、既に君の願いは適えておるぞ。 >

どう言う事???

< 君の考えてる周辺機器はすべてマザーマシンからインゴッドに資
材に現物。

そして設計図までPOしてココに在る。 >

おおおお。

さすがチート。

コレがあればハイパワーマシンも開発可能となるな。

あんがとおお。灰色男さん

< 放置して置くと、現実日本みたいに敗戦は必須となろう。
この悲劇を繰り返すべきでは無い。

日本は古き日本のまま時代を越させるべきだ。 >

その通りです。灰色男さま

日本はけっして愚かな国では無かった。

一部のトップが愚かだっただけの事。
このGも愚かでしたけどね。

<ウム。その通り。

お前と入れ替わったG本人はお前の予想通り・・・>

あぼくくんしてしもたのですね。

オレの代わりに。

<傑作だったぞ。入れ替わったお前となったGは突然ダンプに轢き
殺され、

それでも魂は身体から離れる事も出来ず痛覚の残ったまま火葬され
てしまったのだ。>

うわ・・・。そりゃ残酷

まあ特攻隊の勇士の皆様の痛みに比べれば、まだ軽いモンでしょ

<ウム。ついでにお前の近所に住んでた天才博士、田島正も転生さ
せたぞ。>

何かやな予感するのですが・・・。
まさかアノ方にですか？

<その通り。N島正だ。>

たしか田島は元気だったはずですが・・・。

<お前の事故から数年経過した時に火事に逢い自宅が全焼してしも
たのだ。

どうせならと・・・。>

N島と入れ替えたんですな。
このオニ

<フフフフ。楽しい仕事だったぞ。

特攻隊の勇士の怨念も彼を喜んで焼いてたからな。 >

そりゃヤツは特攻隊の勇士を散々見送つてて、
自分はノウノウと戦後を謳歌してましたからね。
恨まれて当然ですよ。

<まあヤツ等は処理した。

既に地獄でも業火に焼かれてるぞ。

さて今後の方針だが、基本的に私はお前のみ援助する。 >

灰色男様、私のお尻ならお貸ししますわ。

<キモイ。吐き気するから言つな。 >

援助つっーから、身体が目的と思ったのにいい。

<黙れえええ。オレはノーマル。

綺麗な姉ちゃんが好きなの。

ハアハア・・・。

ああ、言い忘れてたが、お前の部屋のみPCとプリンターを設置
しておいたからな。

もちろんネットも繋いである。 >

ヤッフーー

二度とPC触れないと思つてたのにいい。
あんがとおお。灰色男様

< 消耗品は定期的に仕入れて置くぞ。 >
助かります。

< 私の事は極力バラすなよ。
歴史の修正力が怖いから。。。 >

了解っス。
しかしコレで楽になるな。。。
図面も手書きでは無くカラーでキチンと作れる。

< この程度してもアメに勝つのは難しいだろうからのお。 >
そうっスね。
アメの工業力はハンパでは無いから。
ヤツ等に勝つなら、せめて二十年は時代を先取りしないとムリでし
よっ。

< ウム。。。そろそろオレの具現化の時間の限界が来たらしい。
オレは消えるが、今後も相談したい時はメールでも入れてチヨ。
PCにアド入れておいたからね >

アツ、本当だ。
灰色男としっかり入ってる。

< Gよ、頑張れ。アメを叩き潰し、陸助を叩き直せ。
そのために。。。お前達をこの世界にトバセタノダ。。。 >

灰色男はそう言いながら消えて行った。

胡散臭いが、使えるモノは何でも使わないとね。

しかしPCか・・・。

うれしいなああ。

この世界でもネット出来るなんて、ホンマにGちゃん感激いい

(閑話) 灰色男(後書き)

やはり出しました。

ネ申ならぬ灰色男です。

Gはどうするのか？

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてませんが、現実歴史とは違う世界となっています。

ゼロ戦（前書き）

零戦（仮名）が誕生しました。

ゼロ戦

Gです。

灰色男のプレゼントにより、今後の作業が凄く楽になりました。

まさかこの世界でネットが出来るとは・・・。

おかげで大半の設計図も入手出来ました。

POした設計図や計算書を各メーカーに渡したら、ビックラされましたよ。

おかげで日本の戦闘機、爆撃機の歴史は爆発的に変化しました。

余談ですが、陸軍から航空隊は消えました。

高野司令が「陸には日本の航空部隊を指揮する資格は無い。」と断言し、

航空製造権、その他はすべて海軍が独占。

パイロットの養成も海軍のみで行う事に。

ついでに、陸軍の徴兵制度も「赤紙」一枚で徴兵出来なくなりました。

何故？

天皇陛下様に併行世界での陸軍の悪行をすべてDVD付きで暴露したからですよ。

航空機製造会社からも無断で徴兵し、

日本でも数人と言われた熟練工を徴兵してたのは有名な話です。

陸助には地べたで走り回るだけがお似合い。

予算も陸が三、海軍が七と言う具合です。

恨まれましたが、おかげで226事件とかのクーデターも起こりそ

うにないです。

だって、陸の訓練とか教練には必ず民間からの監査が入る様になったのです。

ヘタを撃つと、陛下からのお叱りが下ります。

ムダ口とか搭乗なんかもクビにされましたしね（大笑い）。

ついでにシナへの進駐の取りやめや満州からも撤退しました。

アレも陸助が大半の仕掛け人でしたからね。

半島は放置です。ハイ……。

アレとは関わりを持たないのが一番です。

攻めて来たら???

今の日本なら南北東でも返り討ちですよ。

投資した公金はドブに捨てたと思って諦めて貰いました。

どうせ同士討ちで破壊してしまいますからね。

関わらないのが一番です。

それよりも北方領土ですよ。

ナンでも油田とかあったみたいで……。

満蒙開拓団の連中を北方領土に送り、アチラで油田の採掘をしてもらっております。

これがうまく逝けば……。

開戦も相当遅らせる事が可能となりますよ

陸助やその他の事はこの程度にして置いて……。

ヤッファー

ついに昭和七年の段階で零戦（仮名）が完成しました。

既にこの世界では間違いなく世界最強でしょう。

パワーユニットは金星エンジン搭載の1500ps。

速度は580km出ます。

このままでもこの世界では当分困りませんが、我々の野望は止まりません。

「高野少将、ついに零戦が完成しましたね。」

「ウム。併行世界の究極零戦が既に昭和七年の段階で完成するとは。

G、お前のおかげだ。

感謝する。」

「まだまだですよ。この程度で満足してたら我々は負けてしまいません。

ここ十年が勝負なんです。欧米を今の内に引き離しておくべきです。」

「そうだな。併行世界の私もパールハーバー攻撃の見た目の戦果に騙されて・・・。

多くの民を死なせてしまった。

Gから見せて貰った廃墟の日本を見た時はさすがに卒倒したぞ。

アレが自分の仕出かす未来かと思うとな。」

「その通りです。」

所で大和は止められなかったのですよね？」

「ウム・・・。艦船の建造計画はどうしようも無かった。

アレは使い道あるかな？」

「防空戦闘に特化した仕様にしたら戦艦は使えますよ。空母の直属護衛として戦艦は使うべきです。そのために対空砲火も充実させておきましょう。」

「そうか・・・。」

「んじゃ、その設計図は何とか出来るか？」

「・・・。。調べておきます・・・。。。」

高野さんもすっかり染まったな。

オレは某青いタヌキネコみたいに思われているのか？
まあ色々とやってしまったから・・・。
だが後悔はして無いぞ。

余談だが、柴田は予科練の司令をしてもらってる。

淵田は空母航空戦隊の指揮だ。

二人共、常に最新情報を優先的に回してるから、
作戦や演習も常に最悪を想定しても勝てる参謀となってた。
彼等にはPCで未来の情報も教えてある。
親友だしね。

例えば夜間、寝てる時に敵機が低空から攻めて来て、
基地が壊滅的打撃を受けた。

それでも地下に格納してる新鋭機で敵を叩き潰せる。
対空砲火も地下に格納してあるのだ。

八木博士とか盛田博士などをレーダー開発に回し、
外国に八木アンテナの特許を

持って逝かれるのも防げた。

八木アンテナって知ってる？

UHFみたいな形のアンテナだが指向性がムチャクチャ高いのよ。初期のリーダーは大半が八木さんのアンテナだったのは有名な話。無能軍部がリーダーみたいなイロモノは要らないと八木さんにNOを言い渡し・・・。

彼は仕方なく海外で特許を取り、海外の軍隊が美味しく使わせて貰ってたのだ。

アホだよな・・・。

今は平和だが、十年以内には戦争の真っ只中に放り込まれてしまう哀れな子羊国家の日本には、とにかく時間が足りない。

シナから手を引いたり、半島を放置したり、満州からも撤退したがそれでもアメは我々に牙を剥くと思う。それも確実に。

まずは国力だ。

大馬力のエンジンは現状では1500馬力が限界。どうしてもケルメットとかクランクの鑄造が難しいのよ。

こればかりは経験が必須。機体に関してはすべての図面を国内メーカーに渡し、必要な機種のみを作成して貰う予定だ。

もちろんそのままで作るのでは無い。

キチンと強度を計算し、ムリと事故の無い飛行機として貰うのだ。

さて・・・。

完成した零戦は皇紀の年号での命名とはせず、歴史通りのゼロ戦として採用。

海外の連中も招き盛大に宣伝したった。

何故って???

売るためですよ。

いやああ、フランスとかイタリアが見事に食いつきましたね。
タイも一応、独立国ですから欲しそうでしたが、金が無いとか・・・
かわいそうなので金では無く、作物や掘り出した鉱石、原油との交
換としました。

アメモシヨックを受けてましたね。

まさかこんな東洋の島国がこんな最新鋭機を開発出来るとは夢にも
思わなかったでしょう。

あつ、売るのは友好国のみでっせ。

アメにも一応は売りました。

エンジンは劣化版の金星を付けてね。(笑)

「高野中将、売れましたね」

「ウム。アレだけの名機だ。そりゃ売れるだろう。」

「まあ、ベースの機体とは別にエンジン、武装はオプションとしま
したけどね。

さすがにあのマンマでは売れませんよ。」

「そのオプションとやらも我々には優位となったな。」

「ええ、何せ同じゼロでも輸出ゼロと本家ゼロでは性能に格段の差
が出るのですから。」

「ムフフフフ。」

まあ、それでもこの時代の戦闘機としては破格の破壊力があるぞ。
輸出ゼロも・・・。」

「コチラはさらに先を歩けば良いのですよ。」

もう烈風はラインに乗ってますからね。」

「烈風は凄いな。

アレぞ戦闘爆撃機として使えるであろう。

パワーもありタービンも搭載。

また与圧室は出来て無いのだろうか?」

「ハイ。さすがに与圧室は簡単ではありません。

ですが、開発は続行してますから、五年以内にはラインに乗せられると思います。」

「頼むぞ、G。」

ゼロ戦が売れる事により、我が国は輸出で工場は大忙しとなった。満蒙開拓団の連中も帰国し、国内の工場で雇用され国内の需要は潤い始めてたのだ。

まずは国だよな。

戦争の準備も大切だけど。

ゼロ戦（後書き）

ゼロ戦は輸出商品として売り出します。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしていますが、現実歴史とは違う世界となっています。

日英同盟（前書き）

日英同盟です。

本作は作者の妄想で作られております。

日英同盟

Gです。

現在、昭和九年。

開戦予定まで七年しか残されていません。

自分は今、エゲレスに来てます。

何故って？

日英同盟のためですよ。

イギリスと同盟を結び、未来のマリンエンジンGETTですよ。

何故マリンかって？

そりゃ飛燕のためです。

土井さんにも飛燕の詳細は伝えてありますが、開発はストップさせています。

飛燕はマリンで飛ばすべきと考えたからです。

マスタングもマリンで生き返りましたから、アレを搭載出来たら・

フッフフ。

飛燕がマスタングとなるのは確実ですよ。

やはりマリンエンジンはこの時代の夢のエンジンですね。

さて、エゲレスにも当然ゼロ戦も輸出します。

十年は使える戦闘機ですからね。

この時代なら……。

「ミスター・G少佐、始めまして。

イギリス海軍のジョン・タルボルタ少佐です。遠い所をようこそ我がイギリス帝国へ。」

「ミスタータルボルタ少佐、始めまして。
日本帝國海軍のG少佐です。お時間を頂き感謝しております。」

（すみません。会話はエゲレス語です。）

タルボルト少佐とオレは今回の取引のための会談に Buckingham 宮殿に来てたのだ。
国を上げての大取引だが、技術的な事は我々が取り仕切る事になった。

「それにしてもお宅のゼロ戦は素晴らしいですね。
我が国はまだ複葉戦闘機だと言うのに・・・。」

（スピットファイヤーは開発中です）

「まだまだですよ。アレも改良の余地が残されていますから。」

「何と！！あの速度を出す戦闘機でも改良の余地があるのですか？」

「技術には終点はありません。所で今回の取引についてですが・・・。」

「ええ、もちろんロールスロイス社の了解も取り付けて参りました。
それにしてもまだ海のモノとも知れぬマリンエンジンが欲しいとは・・・。」

「我が国は水冷エンジンは遅れてますからね。」

次の戦闘機には是非マリンエンジンを搭載したいのですよ。

ああ、そう言えばマリンエンジンはキャブレター方式でしたね。

我が国ではインジェクション方式がこれからは主流となると考えています。

開発出来たら提供も可能ですよ。」

タルポルタの目はキラリと光った。

マリーンエンジンの現時点での最大の欠点は吸気機器だったのだ。

宙返りすると息つきを起こし、高度が落ちてしまうのだ。

だがエンジンの開発で精一杯で、フロート式キャブレターで凌ぐしか無いと言われてた。

そこへ・・・この朗報だ。

逃してなるモノか・・・。

「G少佐、それは素晴らしい話ですね。我々も開発はしてるのですが。」

今はエンジンの開発で精一杯です。

もし開発出来たら・・・。」

「もちろん友邦の国、イギリス帝国にもお伝えする・・・予定ですよ。まずは同盟ですよ。」

「ハハハハ。モチロンです。」

我が国のトップも今頃は貴方達の国のトップと語り合ってる頃ですよ。」

オレ達が技術的な事を話し合ってる時には高野中將がチャーチルと共に会談してたのだ。

日英同盟のために・・・。

高野さん、頑張ってたね

所変わりました・・・。

マリンエンジンを作ってるロールスロイスの本社です。さすがに進んでますね。

コチラは。

特にシリンダーの製造とかバルブの製造に関しては、日本が追いつくのはまだ先でしょう。

「さすがイギリスの誇るロールスロイス本社だけありますね。我が国の冶金技術はまだまだと痛感しますよ。」

「ですが、あのゼロ戦には驚かされました。凄い運動性能に加え、速度も我々の主力戦闘機の倍近く。試作中の戦闘機でも追いつくのは不可能です。」

「あの程度なら貴国なら数年で追いつきますよ。所で飛行機に大切なのは何だと思えますか？」

「飛行機って・・・。軍用機ですよ。うーん、量産して武器として大量に配備出来る。」

「そうです。それと凡庸性ですよ。軍用機は言わば何でも出来るのが普通で無いといけません。荒地には着陸出来ないとか、夜は飛べないとか、雨だと飛べない。

こんな事では軍用機は落第です。

雨だろつが嵐だろつが、そして困難な作戦だろつが。

何でも立ち向かえなければ軍用機では使えません。

ゼロ戦はその点では、まあ合格点の戦闘機ですよ。」

「そうですね。」

250kg爆弾も搭載出来て、航続距離も千キロ以上飛行出来るつて、

「今の我々の飛行機では出来ない事です。視界も素晴らしいですね。」

「出来ればバブルキャノピーにしたかったのですが、ガラスの一体整形技術が出来てませんので。今回は見送りました。」

「フム……。そうすると、一体整形はまだムリなんですね？」

「ハイ。次の世代の戦闘機には採用したいと考えていますが。」

「どうでしょう。それを我々に任せて頂けませんか？」

「Why?もしかして一体整形が可能となってるのですか？」

「その通りです。」

「ですが乗せる飛行機がまだ無かったのですよ。」

「そこへ、貴国のゼロ戦の輸入で、アレにバブルキャノピーを搭載したら？」

「と、考えていました。」

「ナイスですね。」

「フレームの影に敵機が入る事もあり得るので、将来的にはバブル整形にしたかったのですよ。」

「でしたら、それも提供して頂けるのですね？」

「モチロンです。」

「それと整形マシンも一緒にお渡しします。」

「太っ腹ですな。」

「軍事同盟も結ぶ貴国だからこそです。他国ではココまでは譲歩しません。」

「分かりました。キナ臭い世界ですが、同じ島国国家です。万一の危機の時は万難を辞してでも貴国の救済に参ります。」

「宜しく願います。」

では、ゼロ戦の方は・・・。」

「当座、百機の輸出でお許しを。」

それだけあれば貴国ならコピーも可能となるでしょう。」

「了解しました。」

では、コチラはマリーンエンジンの設計図とマザーマシン。」

そしてマリーンエンジン千機分をお渡しします。」

同盟についての報酬はバブルキャノピーの整形マシンで・・・。」

「ハイ。結構です。」

それからしばらくタルボルタと今後の戦闘機情報の交換に会話が弾んだのは言うまでも無い。

日英同盟（後書き）

イギリスと同盟を結びました。

これで飛燕がマスターングとなる・・・かも。（^| ^）

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてませんが、現実歴史とは違う世界となっています。

独逸帝國（前書き）

今回は独逸帝國です。

独逸帝國

Gです。

日英同盟は無事結ばれました。

マリーンエンジンはロールスロイス社から技術者も派遣され、日本の川崎重工明石工場で作る事になってます。

もうお分かりと思いますが、飛燕は日本のマスタングとなって出て来ます。

飛燕の長所とマスタングの特徴をミックスしたオバケ戦闘機になります。

飛燕の最大の長所はとにかく頑丈だった事ですからね。

音速近くまで速度を上げて壊れなかったと言うのは事実ですから。何故、活躍が残されなかったのか不思議な位です。

さて今回は独逸帝國ですよ。

「イタ公抜きで今度は戦^ヤろうぜ。」と言いたくなる位、独逸は好きです。

そう・・・。

日本は独逸、英国、日本の三国で今回は戦^ヤう予定です。

独逸ですが、ヒットラーが居ません。

よってハーケンクロイツも靡いてなくて、帝政独逸帝國のままです。

調べて見ると「ヒットラー伍長」は軍隊には入らず、画家として頑張ってます。

妻のエヴァブラウンと悠々自適の生活をし、

ピカソとヒットラーは世界の画家として認められてました。

コレでいいんじゃないネ？

独逸はビスマルク帝政のまま、戦後を送っております。
英国とも仲良く付き合う仲とか……。

「G中佐、貴国のゼロ戦は中々の出来ですな。

我が国もメッサーシュミットとハインケル、フォッケウルフと作成
していますが、

まだ形になるに至っておりません。」

「メッサーシュミット博士、Bf109は十年は使える戦闘機にな
ると我々は確信しています。

卑下なさらず、開発に勤しんで下さい。

ただ、航続距離はもう少しあればとは思います。」

「Bf109は迎撃戦闘機^{インターセプター}として開発したのですが、防空では無く、
侵攻戦闘機に使われそうです。さすがに迎撃戦闘機として開発した
飛行機が侵攻作戦に

使われるかと思うと、ヒヤヒヤしています。」

「博士、これは絶対に他国、特にソ連とかアメリカには漏らさない
で欲しいのですが、

貴国の戦闘機でもある程度は航続距離を伸ばす秘訣があります。

これは我が国と独逸の親交のための贈り物と考えてください。」

「ほ、本当ですか？まだ他国に知られていない技術を我が国、しか
も私にですと？」

「ハイ。詳しくは後ほど設計図と現物をお渡ししますが。
爆弾形式の落下タンクを装備させるのですよ。

戦闘機に。」

「戦闘機に落下タンクですと？」

「ハイ。使い捨ての落下タンクを我が国のゼロ戦は装備しております。」

「これは輸出ゼロ戦には備えておりません。」

「我が国だけの秘密ですから。」

「なるほど……。確かにこれは知られると不味いですよね。」

「ココだけの話ですが、我が国独自のゼロ戦は既に航続距離は三千キロを凌駕してます。」

「なんと……。三千キロ以上も飛べるのですか？
戦闘時間も入れてですよね。」

「その通りです。もちろん輸出ゼロ戦は落下タンクも装備出来ませ
ん。」

「これは敵に知られると重大な失策に繋がるからです。
それでも今の時代なら、数年は追いつかれる事は無いと自覚はして
ますが。」

「その通りです。」

「我々の試作メッサーでも、貴国のゼロ戦よりも性能は下です。
ただ、同盟を結ばれる国にはその日本版のゼロ戦の秘密を教えて頂
けるのですよね。」

「その通りです。」

「信じるに値出来る国には秘密は極力持ちません。」

「有難い話です。我々も日本帝国とは良きお付き合いを望んでおり

ます。」

「ココでけのお話にして欲しいのですが、我々は数年以内にはソ連が貴国に攻め込むモノと
考えています。軍備は十分でしょうか？」

「未だに我が国は第一次世界大戦の始末に追われ、軍備は不十分で
す。

そのためには貴国みたいに技術も軍備も見識もある国との同盟は大
変有難く思います。」

「我々も同じですよ。我が国はアメリカやソ連からは東洋の小国と
罵られておりますが、

その我々でも最先端の戦闘機を輸出出来るのです。

ただ、我が国は海に囲まれております。

そのため、陸軍での航空機開発は断念させました。

理由は陸しか飛べないパイロットなんて不要だからです。」

「耳の痛い話ですが、理解は出来ますね。

我が国も大国に囲まれ、ある意味欧州の陸の孤島でもあります。

我が国のビスマルク総統も好戦的な人ではありませんが、攻めて来
られたらお引取りして

貰うしかありませんからね。」

「その通りですよ。我が国もシナにも手出しせず、国の中で出きる
事のみに専念してるにも

関わらず、アメリカからは色々と介入を入れられて困っております。
そのためには同盟国を求め、国の力を強化するべきです。」

「同意出来ます。日本帝国と英国、そして我が独逸帝国との三国で

薄汚い大国との勢力に
対立出来る力を付けるべきです。」

「そのための同盟ですからね・・・。」

メッサーシュミット博士や独逸空軍、海軍との交渉はうまく行きそ
うだ。

軍事、ならびに国との同盟も結ばれた。

独逸からは膨大なマザーマシンと最新技術の提供が。

我が国からはゼロ戦百機と空母、戦艦の設計図。

そして航空機技術の秘密が渡された。

独逸も周辺友好国に出来上がったメッサーシュミットBf109を
輸出開始し、

経済力と周辺諸国の友好化。

武力の強化に努めてるらしい。

我が国も頑張らないと。

ただし特定三国以外とね。

独逸帝國（後書き）

独逸帝国との友好条約が結ばれました。

追記です。

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしていますが、現実歴史とは違う世界となっています。

パイロット（前書き）

予科練の改革に入ります。

パイロット

Gです。

ヨーロッパ巡りからようやく帰国しました。

国内は戦闘機の輸出で活況となっております。

外貨が入ると言うのは、国力の増加にも繋がりますね。

戦闘機で外貨を稼ぐと言うのもアレですが、売れるモノなら売るべき。

陸軍が軍縮に入り、赤紙と言う名の徴兵も過去の話となりました。

軍隊は基本的に志願制度で良いのです。

一家の大黒柱を赤紙一枚で取り上げると言うのは、国力の低下にも繋がります。

女子供では、一家を支えられませんからね。

さて、予科練です。

陸軍航空隊が無くなったので、国内のパイロットはすべて海軍が養成する事になりました。

元々の陸軍パイロットも海軍に入り、航法とか着陸訓練のやり直しをさせられています。

彼等を空母に下ろすなんて自殺行為ですからね。

まずは海軍式の三点着陸のマスター。

次が航法訓練です。

推測航法は海軍パイロットには基本ですから。

陸軍のパイロットは飛ぶだけの仕事ばかりでした。

彼等も海軍に入り、その覚える事の多さには閉口してました。

海軍式に慣れればすぐに使える様になるでしょ。

予科練ですが、重爆と戦闘機のパイロットの養成に専念する事になりました。

重爆は四発機を開発、（一式陸上攻撃機を四発化しました。）

戦闘機は迎撃機、艦載機、進行戦闘機の三種類がメインとなります。迎撃戦闘機は雷電と開発中のジェット戦闘機。

艦載機はゼロ戦が小型空母、烈風が大型空母に搭載。

侵攻戦闘機は飛燕です。

飛燕はマリンエンジンを得た事で、史実のマスターング以上の戦闘機に化けました。

土肥さんも大喜びですよ。

パワーに余裕もあり、高空も飛べる。

日本海軍の陸上戦闘機はこの四種類で賄います。

ジェット機は国内のみで運用です。

まだまだ外には出せません。

予科練ですが、史実みたいに甲飛とか乙飛とかの区分は一切してません。

すべて期で表記しています。

彼等は日本を支えるエリートなのですからね。

兵学校出身者は事務に専念する事にしました。

隊長と言つ名の赤子を優秀なパイロットにさせる訳には行きませんか。

パイロットはすべて予科練出身者のみで編成しています。

おかげで現場の部隊からは大好評です。

煩い甲板士官が事務職で大人しいヤツばかりになったと・・・。

一応、彼等も飛行訓練は受けてますが、飛ばす事はありません。

邪魔です。ハイ。

その後の日本では「大空を舞え、若者よ。海軍予科練飛行生徒募集
中。」の

ポスターが兵学校よりも高い人気を誇る様になりました。

兵学校は基本的に事務職ばかりです。

そして「ココ」が一番違うのですが、功績を立てた兵士は士官は
るか、将軍クラスへの
道も開ける様にしました。

ボンクラ士官ばかりが将軍となつてたから昭和の将軍は大半がボン
クラだったのですよ。

兵学校は事務系の学校と成り果てました。

また既存のパイロット兵士も高い技術を習得した兵士は、
士官教育を施しガンガン昇進させます。

柴田も淵田も、そして高野大将も大歓迎ですよ。

日本が弱くなつたのは、士官がボンクラばかりだったからです。
艦艇の古参下士官も士官となれる様にしました。
彼等を古株として腐らせるのは宝の持ち腐れですから。

我々の目的は最終的に「世界一の海軍」を目指す事です。

放置してたら日本海軍は滅ぼされてしまいます。

現在、昭和十一年、開戦予定まで五年となりました。

パイロット（後書き）

予科練と士官制度の改革をしました。

兵学校出身者ばかり優遇した海軍は狂ってましたよ。

古参下士官こそが海軍の要だったのにも関わらず、ボンクラばかり
重宝し、

海軍を潰したのですからね。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてませんが、現実歴史とは違う世界となっています。

空母（前書き）

いよいよ新鋭空母の誕生です。

空母

Gです。

ようやく・・・。

空母が生まれ変わりました。

既存の空母もすべて改造し、1960年代から流行り始めたアングルドデッキ形式の空母です。

カタパルトを装備し、着艦は斜めアングルドデッキに。

離艦と着艦が同時に出来るのでパイロットからも大好評です。

エレベーターはすべて艦外に装着。

いや～～～!!

楽ですよ。こりゃ。

何故、この様な形式が戦前から流行らなかったのか不思議です。

あ、空母は我が国のトップシークレットです。

海外にも、そして同盟国にも見せません。

知られるのは戦争が始まった時のみですね。

艦隊は日本海か東シナ海で演習してます。

艦隊として見せる場合は練習空母のみ公開してます。

赤城、加賀は機関の換装を行い、速力も32ノットまで出せる様になりました。

低速の空母ではイザと言う時に大騒ぎになりますから。

空母の艦長には、パイロット出身の古参下士官上がりの将官を据えました。

元々がパイロットですので、判断も的確。

逆らう下士官は皆無です。

やはり古参下士官を冷遇してた旧海軍は狂ってましたよ。見て下さい。

我が機動部隊の精強ぶりを。
パイロットは全員叩き上げ。

ヘタレ士官はすべて事務です。

一応パイロットの資格は持たせていますが、複葉の連絡機に乗せる程度です。

なを、士官となる元下士官にはしっかりと海軍士官学校に出頭させ、士官教育を施しております。

もっとも彼等は軍務にも精通し、作戦関連のみを仕込めばOKですからね。

副艦長や基地司令を数年経験させたら海軍大学に出頭させ、海軍の要となって貰います。

兵学校は今や帝國大学同様の事務系統学校と成り果て、有能な頭脳「だけ」の持ち主の集う学校になりました。

「高野長官、いかがですか？未来に現れる予定の空母の感想は？」

「Gよ、凄いモノだな。

まさか離陸と着艦が同時に出来る空母になるとは・・・。

それにあの舷外エレベーターは素晴らしい。

全く空母の威力を損なう事無く艦載機を収納出来るとは・・・。

我が国の艦隊設計は間違ってたな。」

「まだまだ未来にならないと、出現しない空母ですからね。

アメリカでも終戦間際にならないと舷外エレベーターは出現しません。

それでもアメリカの空母はダメコンも素晴らしい活躍を見せます。」

「ウム。我が国の海軍艦艇乗員には戦闘訓練同様にダメージコントロールの訓練も

徹底しておく様に通達しておく。」

「お願いします。艦艇を失う事は我が国の貴重な資源の喪失と同様です。」

沈みさえしなければ、艦艇は修理して使えますからね。それと……。」

「分かっておる。パイロットの落下傘訓練だろう？」

「その通りです。」

いずれは射出式のコックピットを作る予定ですが、まだそこまでに至りません。」

経験豊富なパイロットは戦闘機十機よりも高価な資産なのです。」

自爆強要なんて愚かな事は絶対に避けてください。」

部隊にも徹底をしておくべきです。」

これは艦艇乗員も同意語ですよ。」

ムチャな戦訓の犠牲となった多くの戦士の魂がそんな事を自分に言わせるのか？」と、

オレは考えもしたが、陸軍の兵士の数倍は金がかかるのが海軍の兵士なのだ。」

一人の兵士を失うのは国費を失うと同義。」

戦闘で戦死するならともかく、無駄な自爆強要なんて絶対にしてはならぬ。」

コチコチの明治男にはそろそろ現場から離れて貰う時期だな……。戦争が始まる前に叩き上げの下士官上がり士官のみを実戦に出せる体制にしないと。」

「高野長官、そろそろ古くから居座る年功序列の石頭さんには……。」

「

「ウム。海軍大学とか閑職に回そう。
彼等が後の悲劇の元凶ともなるのだからな。
自分も含めて……。」

「長官はまだまだ頑張って貰わないといけませんよ。
私が色々出来たのも理解者である長官が居たからこそです。
改革が完成するまでは頑張って貰います。現場で。」

「そ、そうか……。
まだ自分は必要なのか……。」

何だ？

高野長官の目がウルウルしてるぞ???

「自分の愚かな真珠湾攻撃で日本の臣民に塗炭の苦しみを与えた事
を考えるとな。」

自分が死ぬのは構わぬが、日本臣民やヒナ鷲の連中を地獄に叩き込
んだ事だけは、
例え自分が地獄に落ちても忘れる事は出来ぬ。」

「長官、もうその未来には絶対になりませんよ。
幸いにも国力は増えつつあります。」

万一ハルノートを叩き付けられたら……。」

「分かっておる。」

返事を曖昧にしてノラリクラリと出来る限り時間を稼ぐのだな。」

「ハイ。それと第一撃だけは敵に叩かせます。
ポテクリ叩きはさせませんがね。」

「沈めても構わぬ艦隊に偽装を施し立派な戦艦に見せかけるのだから？
もう準備してある。」

「見た目は長門に見える輸送船戦艦モドキだな。」

「運用させる船員は攻撃の予兆を感じた時点で全員脱出させるので
すよ。」

「もちろんだ。無駄な死者は絶対に出してはならぬからな。」

「ヤツ等の得意顔が眼に浮かびますね。」

「フフフ……。そうだな。」

「ヤツ等が知るのには戦後になるのは確実。」

「それまでは日本の戦艦を沈めたと国中が大騒ぎになるだろう。」

「我が国の大本営にも徹底させてくださいな。」

「被害は大きめに。戦果は少なめに……。ですよ。」

「分かっておる。」

「陸軍の無能は全て中枢から叩き出した。」

「我が海軍の無能もリストアップしておる。」

「でも山口多門、小沢治三郎、その他リストに掲載しておいた要員
は絶対に残して下さいよ。」

「特に山口司令は日本の宝です。」

「多門丸はそんなに優秀だったのか？」

「私達の知る歴史の山口司令は日本海軍最高の働きをしております。」

逆に惨かったのが、私、ことGと南雲さんですよ。そして……。」

「ウム、皆まで言うな。」

自分も同罪だからな。彼等には悪いが後方基地の司令として彼等には働いて貰う。」

「お願いします。私も歴史上のGとはならない様に頑張りますので。」

「お前が居たからこそ、今の日本があるのだ。絶対に死ぬなよ。」

「我々はバックアップとして、日本の後方を守りますよ。下手糞が前線に出ても邪魔なだけです。」

戦争は準備と作戦と訓練が全てですよ。戦う前に不安要因は全て消しておけば、我が軍の優秀な下士官が戦場で戦ってくれます。」

「そうだな。」

我々が戦場に出るのは彼等には邪魔でしか無いだろう。我々は後方で彼等のお膳立てに徹しよう。」

「頑張りましょう。高野司令。」

高野さんも気にしてたのだな。

並行世界の自分の仕出かした事を。だが、もうそれは起こらない。起こしてはならないのだ。

まあ今は日本は平和国家だ。

一応は・・・。

コレで開戦までの時間も稼げるだろう。

何とか数年でも遅らせる事が出来たら・・・。

空母（後書き）

アングルドデッキの空母が完成しました。

全て既存の空母を改良。

大和と武蔵は戦艦にしましたが、信濃は最初から空母として起工して
ます。

誕生は開戦前を予定してます。

追記

このSSの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてませんが、現実歴史とは違う世界となっています。

英雄（前書き）

武器関連はそろそろ置いておいて・・・。

英雄

Gです。

現代日本で知られてる日本のトップエース達が我が海軍航空隊に出来る限り揃えました。

加藤隊長、彼こそは総司令に相応しい人間と思います。

高齢にも関わらず、最前線で部下と一緒に泥と血に塗れ、インド洋に散った英雄。

坂井三郎。

批判はあれど世界から尊敬されたエースです。

岩本徹三。

西澤と共に日本のトップエースとして知られてました。

西澤広義。

岩本ノートが公表されるまでは日本のトップエースとして知られてました。

菅野直。

知る人ぞ知る菅野ブルドッグ。兵学校ではエースの道が無いと知り、予科練から兵卒として海軍に入隊。

メキメキと腕を上げてます。

笹井醇一。

ラバウルのリヒトフォーヘン。ボンボンですが気合の入ったいい顔してますね。

彼も兵学校には入らず、予科練に来ました。

その他未来のエースは全て我が海軍に……。

正直笑いが止まりません。

戦争が始まったら、彼等には命を大切に戦って貰う予定です。

何としても彼らだけは死なせてはなりませんよ。

軍部の方針として、英雄はキチンと新聞で公表し、定期的に故国で

表彰する予定です。
そう……。

戦時中の独逸空軍やアメリカみたいヒーローとしても扱います。
彼等は国の宝です。

ただ、ある程度戦ったら内地に戻って貰いますけどね。
陸軍航空隊が消えたおかげで、航空部隊にも余裕が出ました。
キツチリとローテーションで部隊を回します。

「加藤少佐、貴方に今後は我が海軍航空隊の総指揮官として戦って頂きます。」

「……元、陸軍航空隊の私如きにその様な重責を……。
この加藤、命を削ってでも重責にお答え致します。」

「イヤ……。死んで貰っては困るのですがね。
既にご存知とは思いますが、数年以内には我が国は戦争に巻き込まれるでしょう。」

その際は我々は生きて母国に奉仕しないとけません。
特にパイロットは育成に膨大な年月と国費がかかります。
普通の兵士とはケタが違います。

加藤さん、貴方には彼等に命を大切にしてお戦う様に指導して欲しいのです。
潔く散るなどとバカな考えは流行らせてはなりません。」

「分りました。G中佐。

この加藤、命続く限り若人の飛行兵士の命を大切に、部隊を率いさせて頂きます。」

ヨッシャ。

加藤隊長が部隊を率いてくれたら安心だ。

陸軍航空隊でも加藤部隊だけは別格だったからな。

未来のEースがすべて手に入り、後は実戦経験のみ・・・。

どこか適当な戦場は・・・。

アツ、あつたああああ。

そう・・・。

内戦が続くシナですよ。

もちろん公式な軍隊としてではなく、日本軍を一時的に退役して貰い、

義勇軍として参加させるのです。

蒋介石率いるシナ国民党軍に参加させ、協賛党軍との戦いに関与させるのです。

目的??

そりゃ経験を積ませるためですよ。

日中戦争の目は潰しましたが、内戦は相変わらず続いているのがシナ。蒋介石もコチラの事情を話すと、諸手を上げて賛成してくれました。コチラが欲しいのは経験のみですからね。

戦闘機は自前ですし、パイロットも貸し出し。

通称、空蛟部隊として後に恐れられる部隊が誕生です。

シナ協賛党軍のバックはソ連ですが、戦闘機はI-15です。

複葉のクルクル回るしか無い戦闘機ですから、

戦闘機の性能に格段の差があり、かすり傷すら負わせられません。

何分にも経験を積ませるためのみの義勇軍です。

戦士の皆様には絶対にムリはするな。

一撃離脱のみに徹しろと徹底しております。

とにかくソ連軍機は雲霞の如く湧き出て来ますから、いくら落とすても減りません。

我が軍の戦闘機はアシは長いですから、敵に攻め込まれる事はありません。

ません。

侵攻して叩いて引いての繰り返しです。

適当に戦わせたなら国内に引いて貰い、次の部隊と交代。

交代した部隊は休養させた後に国内の部隊で戦訓を後輩の伝授。

実戦に勝る経験はありませんからね。

一応無償ではあまりなので、シナ国民党軍から敵機撃墜の度にボーナスを出して貰ってます。

まあ五機も落としたら交代させていますので、チヨイエースが誕生する程度です。

あ、戦闘機は飛燕をP40モドキにして参加させてます。

ラジエターを前面に移し、シャークマウスを書いて……。
そう……。

実史のフライングタイガースが日本軍関与と言う形で出現。

協賛党軍からは空飛ぶサメと恐れられる存在となりましたが、撃墜される戦闘機は皆無なので、

正体がばれる心配もありません。

定期的に本国に召還してますし、戦闘機もオーバーホールの際はバラバラにして本国に

送り返しています。

加藤隊長もモチロン参加して貰いました。

いや、この方はカツコイイです。

鬼隊長として知られてましたが、人情家でもあります。

自分で落とした敵を想い、夕餉を敵に捧げたり、撃墜した敵には必ず敬礼で

見送ったり。

まるでレッドバロンですよ。

世代的には同世代に近いのか……な？

坂井さんや岩本虎轍、笹井、西澤も腕を上げて来ました。

五機に撃墜が達したら本土召還と決まってるのに、彼等は帳簿を改定して、

機数を誤魔化し、三十機も落としてます。

まあ他の連中ならともかく、要のエースには甘くして置きましょう。蒋介石からは我が義勇軍の事が漏れる心配ありません。

安心して練習代わりに空中戦の実戦経験を積ませられました。

こうして戦う事、数年……。

いよいよアメリカが改訂版のハルノートを我が国に叩きつけて来ました。

いよいよ開戦か。

英雄（後書き）

実戦に勝る訓練はありません。
次回は開戦・・・かも・・・。

ハルノート（前書き）

歴史は頑強な河の流れの如く変えられないモノなのか・・・。
やはりこの世界でもアメリカはハルノートを突きつけて来ました。

ハルノート

Gです。

やはりハルノートは突き付けられました。

内容ですが、シナ義勇軍の撤退。

戦闘機輸出の即時停止。

すべての戦闘機をアメリカのみに輸出。

軍備の削減。

トラック諸島の返還。

その他日本が飲めないモノばかりです。

飲まない場合は戦争も辞しないとか・・・。

ま、予想はしてましたから、慌てる事はありません。

大臣にもノリクワリと交わせと通達してありますから。

「高野長官、やはり来ましたね。ハルノート。」

「ウム。歴史は繰り返すと言うのは本当だな。

いかに努力しても重大な歴史は変えられぬと言う事か・・・。」

「でもご安心を。」

陸軍は既に帝國軍の一部となり暴走する事は不可能。

我が海軍も安易な開戦は・・・、しません。

安易な開戦はね。」

「Gよ。既に偽装艦隊はトラック 硫黄島間をブラブラと往復航海してある。」

もう少ししたらアレも・・・。」

「敵が食い付きますね。トラックは空なんですよ？」

「ウム。壊されてもすぐに修復出来る建物しか残してはおらぬ。燃料補給は巨大タンカーを造ってたからな。」

「据え置きของタンクなんてカモでしかありませんからね。タンカーには護衛をしっかりと付けて下さい。ある意味戦艦よりも大切な存在です。」

「当然だ。アレは我が国の至宝だからな。アレで艦隊すべてを賄える。航空隊なら機動部隊と基地航空隊全てだ。」

「これだけの燃料を喪う事は絶対に避けなくてはならぬ。」

「その通りです。併行世界の日本帝国は輸送船団の護衛を疎かにして、糊口を凌ぐ事が

出来なくなり、敗戦に追い込まれました。

潜水艦対策と輸送船護衛こそが勝利への近道です。」

「ウム。戦闘機乗りには向かぬパイロットは対潜部隊のパイロットとして輸送船護衛空母に

乗り組みを命じてる。不満はある様だが、大局のためには文句は言わせぬ。」

「その通りです。激しい機動は出来ない体質の人間でも穏やかな飛行なら出来る人間は

大勢居ます。彼等を逃してはダメですよ。」

対潜部隊とか大型爆撃機には向いてるのですから。」

「対潜航空機の威力はバカに出来ないモノだな。」

今の我が国で、コレだけの対潜哨戒機が出来るとは・・・。」

史実の東海対潜哨戒機は既に訓練でも抜群の威力を發揮してたのだ。この時期でも開発可能で、長時間船団の上空を哨戒出来る素晴らしい機となつてた。

護衛はゼロ戦。(ゼロ戦には型は存在せず、単にゼロ戦としてた。)
日本海軍のF4Fとして大活躍している。

既に第一線の艦載機は烈風21型が常備。
ゼロ戦は護衛空母や輸出仕様として頑張つてる。

ぬかりは無いとは思うが、戦争に確実な勝利は無い。
始めるからには、絶対に負けてはならないのだ。
負けてはね。

その頃のUSA

「糞つ、ジャップめ。」

我々が連合軍としてソ連を攻める予定だったのが予定が狂った。」

「偉大なる合衆国大統領、彼等はイエローモンキーですよ。」

ヤツ等が絶対に飲めない条件を突きつけ、開戦に踏み切らせば良いのです。」

「ヤツ等が飲めない条件??」

「ハイ。ヤツ等はゼロセンの輸出や旧式ライフルの輸出で国を潤しています。」

その輸出をすべて我が国のみに向ける様に要求するのです。
もちろん買値は二束三文でね。」

「フム・・・。」

それならヤツ等はサルの如く、怒り出すな。」

「その通りです。」

政治もロクに出来ないイエローモンキーですから。」

「その他の事も含めておくべきだな。
イマイチインパクトに欠ける。」

また、ヤツ等が挑発に乗らぬ場合は・・・。」

「我が偉大なる合衆国海軍の出番です。」

ヤツ等のビッグセブンの二隻を沈めてしまえば良いのです。」

我々には40cmガンを持つ偉大な巨艦が犇いているのですから。」

「フム・・・。」

どう考えても負ける要素が無いな。良かろう。」

ハル、君の名前でイエローモンキーを叩き潰す内容を突きつけたまえ。」

すべて許可しよう。」

「お任せを。」

偉大なる合衆国大統領・・・。」

こうしてハルノートが完成。」

日本大使に手渡されたが・・・。」

「合衆国の要求はあまりにも一方的だ。」

コレでは黙って詐欺に遭えと言うのと同じだ。」

我々はこのハルノートを詐欺ノートとして世界に通報する。」

世界の民よ。

アメリカ合衆国はこんな詐欺の要求を我が国に突きつけてる。
文明国家のする事か？

我々は世界に問う。」

と・・・。

ハルノートの内容をすべて世界に暴露してしまったのだ。
赤恥をかいたのはアメリカだった・・・。

ハルノート（後書き）

この世界の日本は割合、大人です。
実際のハルノートもノラリクラーリと交わせれば良かったと思います。

ハルノート2（前書き）

ハルノートの続きです。

ハルノート2

日本外務省は今回はいい仕事しました。

ハルノートを原文のまま世界の新聞に公表したのですから。

おかげでアメはいい恥さらしです。

武力と国力を背景に日本を恫喝したのがバレたのですからね。

こらちに非が無いのなら、包み隠さず公開するべきです。ハイ。

「高野司令、今回の外務省は良い仕事しましたね。」

「ウム。ボンクラを追放してて本当に良かった。

おかげで世界のアメリカを見る目が悪化の一途だ。

そろそろヤツ等もキレる頃合か？

Gよ。」

「もうそろそろでしょうね。

お陸奥とお長門はまだ健在ですか？」

「ウム。何時攻撃を受けても逃げられる様に通達してある。

一応少しは反撃するのだろ？アレ・・・。」

「対空砲火のみは少しだけ装備してあります。

敵を感知したら自動で砲撃。まあ数分で止まりますけどね。」

「ヤツ等が大喜びで長門や陸奥を撃沈したと大騒ぎするだろうな。」

「実際の長門は・・・。」

「ウム。既に改造に入ってる。」

そう、長門と陸奥は今回の騒ぎで撃沈された事になるのだ。公式には。

実際には機密ドックにて大改造を施し、機動部隊に追従出来る速力を持つ、

機動防空戦艦として改造してるのだ。

名前も変わり、防空戦艦薩摩、札幌となるのだ。

誰が見ても長門とは分らない艦形になる。

その頃のUSA2

「ハル国務長官、どうなっているのだ？」

日本はハルノートを世界に公開してしまったぞ。」

「まさか彼等がこの様な愚考を行うとは・・・。
まさに想定外でした。」

「世界の目は我がアメリカ合衆国に厳しくなってる。
これを挽回するには、もはや・・・。」

「ジャップを叩き潰すしか無いでしょう。」

「ヤツ等の戦艦はどこに居るのだ？」

「偵察潜水艦の報告に拠りますと、トラック諸島と硫黄島の間をパトロールしてるそうです。」

「艦名は何だ？」

「ナガトとムツです。」

「Goodだ。日本から40cmガンを持つ戦艦を消す好機だろう。」

ルーズベルトは海軍総司令部を通じ、マリアナ諸島近辺をパトロールしてる日本海軍の

戦艦を撃沈せよと命令を下したのだ。

宣戦布告は撃沈寸前でヨシと考えてた・・・。

「司令、ついにヤツ等がお陸奥とお長門に食い付きました。どうも撃沈と同時に宣戦布告らしいですよ。」

「ヨシ、敵が攻撃を開始したと同時に実況中継でSOSを流せ。

我が帝國海軍の戦艦が自国領海内で無法な攻撃をアメリカに受けるとな・・・。」

中身は日露戦争当時のガラクタ輸送船なので沈めても惜しくは無い。ただ船員の安全だけは万全にしておかないと・・・。

「急げ！！もうすぐアメが食い付いて来るぞ。」

二隻の戦艦モドキを運航させてた船員は船をオートパイロットにして脱出にオオワラワだった。

海軍の指令は「死ぬな。」の一言のみ。

任務は既に終わったのだ。

日頃の準備のおかげか、攻撃開始二時間前には脱出完了。

空からは認識されない様に水色に塗装した脱出船で攻撃が始まるのを彼等は見えた。

間もなくグアム島と機動部隊から出撃して来た爆撃機が戦闘機を伴

い、お陸奥とお長門に
攻撃を開始した。

「ヨシ、早速電文を流せ。」

「コチラ、センカンナガト、アメリカニヨルコウゲキをウケツツア
リ。」

「コチラ、センカンムツ、アメリカニヨルコウゲキデシズミツツア
リ。」

「コチラナガト。ワレスデニチンボツスンゼン。キュウエンをコウ。
」

「コチラムツ。テンノウヘイカバンザイ。」

「ヨシ、これで任務完了だ。敵に気づかれない様に撤収だ。」

任務を終えた彼等は海の色に紛れ、敵に感づかれぬ様に脱出。
無線を傍受してた日本帝国側は、傍受した電文を生のまま、全世界
に放送。

「今八日、帝國海軍戦艦長門と陸奥は、卑劣な米国軍の奇襲攻撃を
受け、轟沈。

数千名の犠牲者と二隻の戦艦を喪失せり。
なを宣戦布告受諾前だったため、我が軍は反撃も出来ず。
アメリカ合衆国に問う。

宣戦布告も無しに他国領海の軍艦を攻撃するのは如何に？」

「不味いぞ。ハルよ。」

「コチラが宣戦布告前に攻撃したのがバレてしまった。」

「大統領、それなら開き直るべきです。」

「我が軍の航空機が攻撃を受けたためやむなく反撃したと。」

「だが沈没地点は紛れも無く敵の領海内だぞ。どう釈明する気だ？」

「我がアメリカ合衆国は正義なのです。」

「卑劣なジャップを潰しただけの事。」

「大統領、貴方は偉大な合衆国大統領なのです。」

「勝てば良いのですよ。戦いは。」

「フム・・・。」

「私とした事が・・・弱気になってた様だ。」

「そうだな。既に戦端は開いてしまったのだ。」

「戦いは始めたが最後。」

「勝つまでは止められぬ。」

「要は勝てば良いのだ。」

「ハル。」

「日本大使館に宣戦布告を通達せよ。」

「大統領、既に日本側から宣戦布告通達書を渡されております。」

「くっ・・・。後手だったか。」

「まあ良い。全軍に通達せよ。」

「太平洋からジャップを叩き出せ。」

ヤツ等を潰せ。太平洋は我が合衆国の海とするのだ。」

ハルノート2（後書き）

遂に開戦です。

偽装戦艦お陸奥とお長門は見事に仕事を終わりました。

ホンモノは改造中です。

次回から反撃開始です。

開戦（前書き）

お陸奥とお長門の撃沈に抛り、日米間戦争の開戦です。
ええ、日米だけですよ。ハイ。

開戦

Gです。

いよいよ開戦となりました。

お陸奥とお長門の撃沈事件は世界に公開しました。

沈没地点もね。

乗員はすべて現時点で鬼籍に入ってる元海軍兵士並びに士官ばかりです。

彼等には少しだけ長生きして貰い、戦死扱いとしました。

遺族は大喜びです。ハイ。

アメには「卑劣な攻撃を受け我が国の大戦艦が二隻も喪失してしまつた。

これは重大な事件だ。ウヤムヤには出来ぬ。

損害を支払ってくれないなら、開戦も辞せず。」

そう通達したら、向こうさんはとつと開戦の書類にサインをしやがったのです。

まあ大国は悪さをして認め事はしませんね。

もつとも世界の目は厳しいです。

同盟国のイギリスやドイツは我が国に同情的です。

さて、開戦と決まったら……。

戦うのみです。

幸いにもイギリス、ドイツとの友好条約でインドからも資源が潤沢に入ります。

邪魔なのは……。

フィリピンの在比米軍ですね。

邪魔なモノは潰すとしますか……。

「諸君、いよいよ開戦だ。敵はアメリカ一国のみ。強大な敵ではあるが、簡単に負ける事は無いだろう。さて、我々の邪魔となるのは、在比米軍だ。特に空軍と海軍は邪魔だ。」

アレを潰さぬ限り我が帝國の輸送船団の危機は去らない。何としても潰せ。」

高野長官の訓示に拠り、在比米軍基地の攻撃が決定。早速膨大な重爆と戦闘機軍団が比島に押し寄せて来た。

「何だ？我が国のB17でも飛んで来たか？」

「マツカーサー長官、大変です。アレは我が軍の重爆ではありません。ん。」

翼に醜いミートボールが書いてあります。アレは敵です。ただちに避退してください。」

「我が軍のカーチスが撃ち倒すだろう。それを眺めるのも楽しみよ。」

「長官、危険です。逃げてください。」

やがて轟々と轟く爆音と共に大空に空中戦の花が咲き始めた。漢達の命を掛けた死の花が・・・。

「ジョン、ジャップのボロ戦闘機が攻めて来やがったぜ。俺たちのカーチスなら一撃で撃墜だ。」

「トニー、油断はするなよ。
ヤツ等はゼロも作った国だ。負けはしないとは思うが、命は一つ。
被弾したら迷わず脱出しろよ。」

「ああ、任せろ……。」

やがて彼等の面前に見た事の無い重爆と戦闘機が押し寄せて来た。

「クツ、スゲー数だ。押し止めるのは難しいぞ。

今すぐ基地に救援を依頼しろ。我々だけではムリだと……。
おい、ジョン。どうした？返事しろ……。」

その時には高空から急降下奇襲攻撃をかけられジョン中尉のP40
は火達磨となって落下してたのだ。

「クソツ、ジョンが殺られた。あれ程油断するなと言ったのに。

グツ、スゲー機動をしゃがる。

は、速い。それに……。何だ???

あの翼から出てる太い棒は……、まさか、キャノン???

トニーがそこまで考えた時、烈風の両翼から四門の20ミリ機銃が
吼え、

トニーの乗るP40は爆散して果てた。

マツカーサーは基地総司令部の窓から自軍の戦闘機が狩られるのを
呆れた顔して見てた。

「な、何だ???

アレは……。」

「総司令、我が軍の戦闘機は壊滅です。間もなく爆撃が始まります。早く地下壕に逃げてください。」

「わ、分った・・・」

爆撃体制に入った一式重爆の胴体から多くの爆弾が落下を始めたのは、それからすぐだった。

一式重爆は本来、一式陸攻として開発される予定だった双発爆撃機を四発とし、被弾能力を向上させ、反撃能力は後のB17以上とした海軍の攻撃機である。まだ与圧はしていないが、二年以内には与圧を装備予定である。

ひゅーーと風を切る爆弾の落下音が鳴り響き、やがてクラークフィールドは地獄と化した。

飛行してた友軍戦闘機はすべて撃墜され、残された反撃能力は対空砲のみ。

高度六千メートル以上の高空を飛ぶ爆撃機に対空砲が当たる訳も無く、

日本軍は悠々と反復攻撃を繰り返した。

やがて爆弾が尽きると、日本軍は去り・・・。残されたのは多くの残骸と瓦礫のみ・・・。

「閣下。我々は負けたのです。」

「ここは捨てて後退するべきです。」

「負けた・・・のか。」

「私は・・・。」

「負けました。これでは復旧も不可能です。残された兵士と共に攻撃を受けていない基地に移動し、反撃体制を整える方が相手に対抗出来る最良の手段です。」

呆けたマツカーサーを副官は諫め、彼を叱咤し生き残ったパイロットや兵士ほ引き連れ、マニラを去るのだった。

その頃の台南基地。

「いやー、今日の攻撃は楽だったな。演習でもこうはいかないぞ。」

「坂井隊長、敵の反撃はやはり一撃離脱ばかりですね。もともと交わすのは楽ですが。」

「油断はするなよ。笹井。」

西澤を見習え。

戦闘は見張りで決まる。

そして・・・おい、菅野。

お前は猪みたいに敵に向かうが、アレでは味方が危険に陥る。絶対にお前は編隊から離れるな。お前はオレの小隊の力王番機に命じる。

西澤の尻をキチンと守れ。

もし西澤がカスリ傷でも負ったら・・・。

お前を命令違反で整備兵に降格する。分ったな。」

怒られた菅野直二飛曹は雷の直撃を受けたみたいに直立不動の姿勢を取り、

冷や汗を流してた。

まさか隊長に編隊を離れたのを気づかれてたとは・・・。

「菅野、お前はオレが全編隊を見れないとでも思ってたのか？
舐めるな。」

自分の率いる全編隊位掌握出来なくて、隊長が務まる訳が無かるう。
そしてこれは全隊員に教えておく。

隊長、そして編隊指揮官クラスとなれば、無線を用いなくとも配下の部下の心くらは

簡単に把握出来る。それこそ指の動きまでな。

弱は自惚れぬな。

敵が弱いのではない。

単に現時点で我々が強いだけの事だ。

明日は敵が強いかも知れぬ。

常に敵は我々よりも強いと意識しておけ。

舐めたら・・・。

次は地獄で敵と遭う事になるぞ。

分ったな？」

「了解しました。」

全隊員が坂井少佐に返答すると、坂井は敬礼し、会議室を後にした。
残された部下達は隊長の訓示を脳内で反芻し反省を繰り返してた。
特に菅野、笹井の両名は、ガツクリとしてたのだ。

彼等は本日、一機の敵をそれぞれ撃墜出来て大喜びしてたのだが・・・。

「菅野、隊長は怖いな。」

オレは敵機よりも隊長の目が怖いよ。」

「笹井先輩、隊長は叩き上げの大先輩ですからね。我々弱の心理などお見通しなんでしょう。それにしても・・・。」

下手すると自分は整備兵ですか・・・。
弱った・・・。」

「心配するな。貴様も栄えある我が日本帝國戦闘隊の一員だ。簡単には降格はせぬ・・・と思う。」

戦闘も大切だが、まずは列機としての勤めを果たす事だぞ。」

「・・・分りました。笹井先輩。
頑張ります。」

「坂井少佐、菅野に敵し過ぎるのではありませんか？」

「西澤、ヤツは才能はある。」

腕も数年経てばオレ以上の腕になるだろう。

だが慢心して撃墜されたら・・・。

それで終わりなんだ。

見込みがあるから叩くのだよ。甘えさせてたら次の出撃でヤツは帰って来れなくなる。」

まずは死なせぬための術を仕込むのだ。西澤、ヤツは任せるぞ。

俺たちの次の世代の指揮官だからな。」

「分りました。隊長。」

初陣となった比島空襲でクラークフィールドは壊滅した。

そして度重なる空襲で在比米軍勢力は続々と削減され、撤退を余儀なくされていた。

布哇真珠湾の海軍総司令部は比島からのSOSを受け、救援部隊を差し向けて来た。

帝國が願ってた展開が間もなく比島からサイパン島にかけて起きる。

勝つのはアメリカか、日本か・・・。

開戦（後書き）

まずは開戦当初の空襲シーンです。

今回は史上初の空母決戦となります。

B17程度に一式重爆の能力は改正しました。
さすがにB29まではムリですね。

緒源表（前書き）

架空武器の緒源を書きました。

緒源表

リクエストもありましたし、今後の話の要にもなりますので、G世界の武器緒源を書いておきます。

戦闘機

ゼロ戦<正式名、ゼロ式艦上戦闘機

エンジン 金星一型 出力 1500ps

輸出仕様は金星二型 出力 1100馬力

全長 9.121m 全幅 11.0m 全備重量 3,150kg

最大速力 572.3km/h(高度6,000m)

輸出仕様は510km

武装 12.7ミリ機銃四門搭載。

Gデータに拠るブローニングのパクリであります。

輸出仕様は7.7ミリ二門のみ。

国内仕様はF4F同様に翼を折りたためる構造。

輸出仕様は折り畳み不能。

航続距離 全速30分+850km(正規)

国内のゼロ戦はすべて空母に搭載。

烈風配備までの主力戦闘機として活躍。

烈風配備後は護衛空母に搭載され、終戦まで活躍。

史実のゼロ戦とは違い、急降下に制限は無く、バランスの取れた戦闘機として好評を得る。

ただしアメリカのみには最グレードダウンした仕様を輸出。

ガラクタ戦闘機として認識される。

輸出先、イギリス、ドイツ。この二カ国のみは国内仕様と同じモノ

を輸出。

フランス、イタリア、東南アジア諸国。グレードダウン仕様。開発、1933年。

ゼロ戦の出現以後、日本の戦闘機は世界のトップを終戦まで走り続ける事になる。

烈風

戦時中の主力戦闘機並びに攻撃機として活躍。

余裕のある出力の発動機を得る事で、艦上爆撃はもちろん攻撃機の役割も兼用。

胴体下部に一トン爆弾まで搭載出来るベイロードを持ち、艦載機として万能を誇る。

全長 11.040 m 全幅 14.0 m

重量 4,719 kg

搭載機銃 マウザー20mm機関銃四門装備。

各250発搭載。

エンジン 火星一型（P & amp; WダブルワスプをGデータに拠るパクリ、タービン搭載。）

出力 2000メートルで2500馬力 10000メートルで1800馬力。

馬力に余裕があるため、いかな任務も達成出来る日本版スカイレーダーとして、

戦後も長期間使われる万能機となる。

最高速度二千メートルにて650 km。

一万メートルにて590 kmを誇る。

翼はゼロ戦同様、付け根から折り畳め、デカイ機体の割には搭載機数は増加してる。

航続距離は落下タンク無しで全力30分+1,960 km。

増加タンク装備でさらにプラス千キロは可。
雷撃仕様と夜間戦闘機仕様では複座仕様となる。
急降下爆撃仕様はダイブブレーキ装備。
いずれの機体も基本は同一のため、戦場での互換修理も出来、現場からは好評を得る。

一式重爆攻撃機

本来、双発で開発予定だった一式陸上攻撃機を四発で開発。
B17と同格の被弾能力を誇る日本版空の要塞。
最高速度 高度六千メートルにて480km。
航続距離五トン分の爆弾搭載で5000km。
全長：22.93 m、全幅：32.54 m、全高：7.20 m。
重量 全備装備で35トン。
発動機 火星一型2500psx4。
開戦初期から中期にかけての日本軍主力爆撃機として世界に恐れられる。
装備機銃は12.7ミリブローニングM2モドキ。
Gデータに拠るパクリである。

その他実歴史と違う艦船。

戦艦長門、陸奥。

世界のビッグセブンとして知られるが、開戦初期のアメリカ奇襲攻撃でマリアナ沖にて、
撃沈されたと言う事に公式資料ではなってる。

実際には機関交換、その他大改造を施し、機動部隊に追従出来る機動性と

防空能力を配備。

機動部隊の守り刀として実力を発揮する防空戦艦薩摩、札幌として

生まれ変わる。

最大速度30ノット。

長40センチ砲六門搭載。その他ハリネズミの如く防空機銃搭載。

空母。

実史の空母が誕生してるがすべてアングルドデッキ、カタパルト搭載。

サイドエレベーター式となってる。

整備甲板には各層に降下出来るエレベーターもある。

整備甲板は開放式。寒い天候の場合や夜間はシャッターで閉じる事も可能。

基本的に開放式で整備。

戦艦大和、武蔵。

改造長門同様に防空戦艦として、機動部隊に追従可能な30ノットの速力を誇る。

武装は長40センチ砲九門搭載。<史実の46センチ砲よりも強力な破壊力を持つ。

多くの機銃搭載にて、防空の要となる。

オマケ・・・。

陸軍、基本的に国内の防衛のみに徹する。

日本帝國は防衛が中心で敵地に攻め込み占領する場合は海兵隊が任務を負う。

陸軍は国内の災害や地元奉仕が任務の中心。

若者は海軍に集中してるので、陸軍は年寄りの集まる軍隊となる。

緒源表（後書き）

陸軍の話はオマケです。

国内の雇用調整にもなるので、仕事の無い浮浪者とかも陸軍に雇用されてますが、

優秀な若者は工場か海軍中心です。

赤紙はありません。

第一次マリアナ沖海戦（前書き）

史上初の空母同士の決戦が始まります。

第一次マリアナ沖海戦

卑劣なジャップの攻撃に抛りマッカーサー率いる在比米軍航空隊、並びに海軍基地は壊滅した。

マッカーサーは夜半にグアムに脱出。

残された兵士はコレヒドール要塞に立て籠もるも、雲行きは怪しい。海軍機動部隊は急遽、パールハーバーを出撃。フィリピンの同胞救援に向かった。

「クソーー。ジャップめ。」

我が同胞になんて事をしやがる。絶対に壊滅させてやるぞ。」

アメリカ太平洋艦隊総司令長官：ハズバンド・キンメル大將は率いる事の出来る

すべての艦艇を率い、フィリピンに急行してた。

輸送船団は率いて居ない。

兵士救援をする場合は艦船に收容する予定だからだ。

まずは敵の日本軍との対決が最優先である。

愚鈍な輸送船を連れて来たら戦えないと判断したのだ。

「まずは敵を叩かないとな。ハルゼーの空母が帰ってて助かったぞ。」

そう。。。

お陸奥撃沈の立役者、ハルゼー率いる米機動部隊は長門撃沈後、速やかに真珠湾に帰還してたのだ。

おかげで今回の太平洋艦隊総出撃に間に合わせる事が出来たのだ。

「これだけの艦隊なら、汚いジャップも潰せるだろう。」

既にヤツ等のビッグガン、長門と陸奥は撃沈したしな。」

彼等は陸奥や長門が偽装戦艦だった事は戦後も知る事は無かった。日本海軍最高の機密として、長門、陸奥は公式にも撃沈された事になつていたので。

「絶対に残るジャップの戦艦も叩き潰し、太平洋からイエローモンキーを叩き出してやるぞ。

総員、戦闘配置！！！」

キンメルは近づいてるであろう、日本艦隊を警戒すべく第一種戦闘配置に兵員を付けた。

その頃の日本側。

「いいか。我々の使命は勝つ事では無い。

敵に打撃を与え続ける事だ。

ただし空の戦いだけは完璧に勝て。負ける心配は無いとは思つが、油断はするな。」

第一機動部隊総司令、山口多門の訓示が無電を通じ、全艦艇に流された。

無線封止はしていない。

敵に気づかれる事も任務の一つだからだ。

「ヨシ、戦闘機部隊はただちに警戒発進。いいか。長門と陸奥の仇だけは取るぞ。」

「「「「「了解しました。「「「「「

全艦艇の乗組員は総員敬礼を行い、パイロットは各自の機に搭乗。発進合図を待ってた。

艦艇乗員は持ち場に着き、戦闘開始命令を待ってた。間もなく怒涛の如くアメリカ機動部隊の戦闘機が押し寄せて来るだろう。

戦いに絶対はない。

今は笑ってる彼等は数刻後にはモノを言わぬ軀となってる可能性も高いのである。」

遠く離れた日本の霞ヶ関、海軍総司令部では・・・。

「高野長官、待つ身は辛いですね。」

「仕方なかるう。我々は準備するまでが仕事なのだ。そして彼等が帰る家を守り固めるのみな。」

彼等を信じよう。」

「そうですね。」

既に命令は下したのです。敵の戦力を削減させよ。

危機を感じたら撤退も可と・・・。」

そう・・・。

今回の作戦では勝つ必要は無いと判断してたのである。

もっとも負ける事は考えていないが、敵の出血のみを求めるのが今回の作戦のプランでもある。

それに勝ってしまうとコレヒドールの引き籠もり兵士を日本で面倒を見なくてはいけなくなる。

それだけは絶対に避けたい。

なので空母のみを片付けたら撤退する様に指示してたのだ。

。後に第一次マリアナ沖海戦と呼ばれる戦いの封は間もなく切られる。

第一次マリアナ沖海戦（後書き）

コレヒドール兵士を引き取って頂くために今回の作戦では勝つ事は
しません。

適当に・・・・・・・・します。

第一次マリアナ沖海戦 その巻（前書き）

いよいよ史上初の空母決戦です。
日本側にも犠牲??が。。。

第一次マリアナ沖海戦 その巻

フィリピンの友軍は負けたがオレ達海軍航空隊は負け नाहीぞ。糞つたれジャップの紙飛行機など、オレ様達のワイルドキャットなら一蹴だ。

堂々たる戦爆連合の大編隊が敵、日本海軍機動部隊に向かった。偵察機の情報では戦艦5隻、空母5隻、その他巡洋艦、駆逐艦を含む大機動部隊らしい。

まずは邪魔な戦艦を潰すべきだな・・・。

ワスプ爆撃隊指揮官、ウォルドロン少佐は潰すべくジャップの艦艇を見繕ってた。

「諸君、間もなく憎きジャップの艦隊上空だ。

まずは邪魔な戦艦と戦闘機を片付けよう。

ナガトやムツを撃沈した我々だ。よもや心配はあるまい。」

「了解です。各爆撃隊指揮官は与えられた座標の戦艦を撃沈せよ。」

総計200機以上の大編隊が間もなく日本海軍艦艇上空に到達しようとしてた。

空母赤城、加賀、その他の三隻の甲板上では全烈風が戦闘機仕様で待機してた。

まずは邪魔な戦闘機を壊滅させるべき。

今回も「エサ」は準備してあった。

戦艦やましる、はるな、きりしまの三隻が人身御供となるのだ。

今回も中身は明治時代から使われたスクラップ戦艦。

ハリボテで山城、その他に似せて作られていた。

防空の穴もこれ等の戦艦モドキ上空はガラ空きとなっていたのだ。

「いいか、空母には一機も近づけるな。あ、例のアレは庇わなくても良いからな。」

間違ってもアレを攻撃してる爆撃機は撃墜するな。

まあ数機程度は生かして帰してやろう。

戦闘機は壊滅させる。いいか。」

各パイロットは母艦司令塔から送られて来る無線を傍受、命令を受諾してた。

「敵攻撃部隊接近中、パラオ島北方より約二百機。

待機戦闘機部隊は直ちに迎撃せよ。」

ただし最初は戦闘機のみ迎撃。空母に向かう爆撃機は撃墜してヨシ。」

命令が下り、甲板で待機してた烈風戦闘機部隊はカタパルトに移動。続々と発進し、数分間にすべての戦闘機は上空に飛び上がった。

「カタパルトの威力は素晴らしいですね、長官。」

「ウム。Gクンの話を始めて聞いた時は、ナニを世迷言と思ったが。」

あの時の言葉を自分は恥じている。

戦闘機がまさか攻撃機の役割を果たせる時代が来るとはな。

おかげで犠牲の心配もしなくてよくなった。」

「その通りです。」

ま、今回は迎撃戦ですから、彼等の訓練の成果を見せて貰いましょう。

それにしてもアメさん……。敵ながら哀れですね。」

「言うな。一応今回も公式には戦死者が出るのだ。」

我々は引き分けて逃げた軍隊となるのだ。」

「分っております。」

既に大本営の新聞発表のゲラも出来上がってたのだ。

後は実際の被害と戦果を入れるだけの……。

艦隊上空では、武藤金義大尉が指揮を取ってた。

「いいか。各機。アレに近づく爆撃機は見逃しても良いが、それ以外は殲滅せよ。」

それと……。

弱の連中は絶対に指揮官から離れるな。

離れた弱は作戦完了後も外出止めにするぞ。」

どの編隊にも必ず初心者の弱が一人は居た。

未来の熟練者として育てるために。

だが一応の特殊飛行が可能となつたばかりの弱はすぐに単独戦闘に入りたがる。

ベテランから見たら、カモでしか無いのだが。彼等はそれに気づかず。

食われてしまうのだ。

そんな彼等を諫めるのに一番効果が出るのは、命令違反をしたら外出止め。

ヤローばかりの軍人生活を送ってる彼等の最大の楽しみが作戦終了

後の休暇や外出である。
それが無くなるのだ。
彼等も必死で先任に付いて飛ぶだろう。

高高度には岩本徹三少佐の部隊が待機してた。
彼の烈風の後部には桜の花が何十も描いてある。
すべて空蛟部隊で撃墜した戦果である。

「隊長の烈風はカツコイいなあ。
何時かオレもあんな桜を自分の機に書いて見たい。
だが当分は・・ムリか。
オレは弱だ。まずは落とされない事から覚えておかないと・・。」

杉田庄一三飛曹は隊長機を眺めながらボンヤリと呟いてた。

「スギ、ボケつとするな。もうすぐ敵戦闘隊が進入して来るぞ。
見逃したら・・バッテリー食わせるからな・・。」

杉田は隊長機から入った無線でビククリしてしまった。
まさか感づかれたのか・・。
ともかく返電はしておかないと。

「申し訳ありません。こちら杉田三番。」

「おう、良い返事だ。オレのケツから離れるなよ。敵が侵入して来たら、
降下攻撃に入る。

オレが撃つ時は撃て。
そしたらオレの戦果の半分はお前のモノだ。
二機落としたら桜を一つ入れられるぞ。」

何と隊長は自分が桜の撃墜マークを欲しがってた事をご存知だったらしい。

頑張っつて隊長の指示に従おう。

やがて敵味方合わせて五百機からなる大空中戦の花がマリアナ上空に咲きだした。

阿鼻叫喚の絶叫と爆煙、曳航弾の軌跡が飛び交う死の花が・・・。

第一次マリアナ沖海戦 その巻（後書き）

次回は悲惨？な事になるやましろ、きりしま、はるなです。

第一次マリアナ沖海戦 その弐（前書き）

いよいよ決戦の始まりです。

第一次マリアナ沖海戦 その式

ヨッシャ、ジャップの連中はどうやら今回もマヌケらしい。

見る、ハルナやヤマシロ、キリシマの上空がガラ空きだ。

戦闘機部隊はガツチリと周囲を固めてくれてる・・・。

コレなら・・・。

マックラスキー大尉は日本軍戦艦上空がガラ空きなのを確認すると、ただちに配下の列機に攻撃命令を下した。

SBDドントレスが悲鳴を上げ、キリシマに突撃して行く。

雷撃機が魚雷を戦艦めがけて発射する。

面白い様に敵に命中する。

我が軍の技術は素晴らしい。

やがてすべての攻撃が終わると思った頃・・・。

突然、我々の攻撃機が・・・。

壊されてしまったのだ。

どうして帰してくれないのだ。

オレ達はもう仕事は終わったのだ。

帰して・・・クレ・・・。

オレの意識はそこで永久に消えた・・・。

「こちら岩本一番、敵の仕事は終わった模様。これより始末にかかる。

全機、まずは戦闘機を始末しろ。

各部隊のサブ小隊は攻撃機を処理しろ。

かかれ！！」

後に米軍からチェリーマーダーと呼ばれる事になる岩本の太平洋戦

線初の攻撃命令だった。

ジヨニー少尉は今日が初陣だった。

「いいなあ。オレも攻撃機に乗れば良かったよ。彼等は戦艦を撃沈できて本当に羨ましい。」

ジヨニーは攻撃機が思う存分暴れているのを心底羨ましく思った。
・が。

突然、攻撃機の一機が炎を吹き上げ爆発してしまった。

「ど、どうしたのだ。今まで対空砲もまばらだったのに。」

「ジヨニー、逃げろ。敵機がああ。」

上を見ると見た事の無い巨大な航空機が我々に襲いかかって来てた。あんな巨大な飛行機なんて鈍重に決まってるだろ？

ジヨニーはワイルドキャットの翼を翻すと、敵機に相對して行った。すると・・敵機から巨大な砲撃を受け、オレの愛機の翼が砕けてしまったのだ。

人事みに考えてるが、あまりに一瞬の事で現実に思えなかったのだ。

「わ、ヤバイ。」

脱出しないと、火が出て来た。

熱い、誰か助けてくれ。オレノテガヤケテシマッテル。

ママ、パパ。タスケテクレ……。」

ジヨニー少尉の乗るF4Fは炎と共に太平洋の藻屑と消えて行った。

「スギ、良くやった。一機撃墜だな。

帰ったらオレが桜を書いてやる。」

「ありがとうございます。隊長。」

「戦闘はこれからだぞ。オレの援護を忘れるなよ。」

「モチロンです。お任せください。隊長。」

「ヨシ。次の戦闘機を始末するぞ。」

岩本の命令に従い、多くの烈風が再び上空に舞い上がって行く。

武藤は悠々と空を舞い続けていた。

あたかも遊覧飛行の如く。

だが彼の目は驚を思わせる獰猛な目で敵を探してたのだ。

やがて五機のグラマンが彼の視界に入って来る。

武藤は列機に待機すると命令し、数機が鎌首を持ち上げて武藤に襲いかかろうとした瞬間。

一瞬の連射でグラマンは火達磨となって墜落して行った。

だが日本を舐めてた彼等はまぐれと思いい、再び武藤に襲いかかろうとしたが。

やはり一瞬の急降下と一撃の射撃でグラマンは翼を碎かれ波間に消えて逝く。

驚いた彼等は迎撃を諦め退却しようとしたが、逃げ腰の敵を見逃す程、武藤は甘く無い。

列機に回り込ませ逃げ場を防ぎ、やがてすべてのグラマンは壊滅して消えてしまった。

はるな、きりしま、やましろが波間に消えようとしてた頃、まだ残弾のある攻撃機が見慣れぬ戦艦を見つけ、攻撃に移ろうとしてた。

「ウォルドロン少佐、まだ戦艦が残ってましたよ。アレも殺つてしましましょう。」

「ああ、アレも力モだろう。あと何機残弾が残っているか？」

「二十機は残っております。」

「それだけあれば撃沈は可能だろう。私は上空から指揮を取る。気をつけてかれ。」

「了解しました。」

私の可愛い部下達は絶頂だった。

この瞬間までは・・・
だが見慣れぬ戦艦は、今まで見た事も無い対空砲火を放ち始めたのだ。

私達の部下が・・・次々と殺られて往つたのはそれからすぐだった。何だ？

我が軍の戦艦でもあんな対空砲は撃てないぞ。まるで火の船だ。

ああ、また部下が・・・

それからは一方的な狩りの時間だったらしい。

私は雲の中に逃げ込み生きて帰れたが、部下の大半は戦艦三隻の撃沈を土産に。

神に召されてしまったのだ。

私が命からがらマザーの元に帰ると・・・

我がマザー。

レディレックスは業火の中に居た。

上空には例の戦闘機が飛行してた。

何故戦闘機・・・のみが？

その疑問はすぐに解けた。

彼等は爆撃機でもあり、雷撃機でもあったのだ。

攻撃が完了すると次は機銃の雨を我が軍の甲板要員に降らせ、無慈悲な攻撃を繰り返してた。

私の愛機にはもう燃料が残されていない。

だがマザーは沈没寸前だ。

仕方ない、デストロイヤーに拾って貰うか・・・

私はスロットルを絞り愛機と最後のランディングを楽しむ事にした。

やがて愛機は波間に着水。

幸いにもコパイの連中に怪我は無かったらしい。

ハルゼー長官も同じデストロイヤーに乗艦してたので、攻撃成果を報告した。

母艦は全滅したが、アチラも戦艦を三隻も撃沈されたのだ。

ほぼ相打ちと言っても良いだろう。

多くの部下は再び帰らぬ旅に出してしまったが、彼等も満足してるだろう。

三隻もの戦艦を撃沈したのだ。

やがて日本海軍は撤退して行ったらしい。

我々もコレヒドールの友軍を救出する任務がある。

幸いにも救出の間には日本軍の反撃は無かった。

キンメル長官は、相打ちにはなったが、作戦としては成功したのだ。

急いで母国に帰り、新しい母艦を調達せねば・・・と仰られてた。
我々は勝った・・・のか???

「高野司令長官、何とか初期の目的は達成出来ましたね。
敵の母艦は壊滅。戦艦は見逃しましたが。」

「今はコレで良い。
ヤツ等も戦艦が残ってる事で、色んな作戦を考えるだろう。
我々は防衛を固め、敵のパイロットを壊滅させるのが最大の目的だ。
それと・・・。」

「潜水艦狩りですね。」

「ウム。潜水艦だけは恐ろしいからな。
絶対に防衛圏内に敵の潜水艦を侵入させるな。」

「東海に頑張つて貰いますよ・・・。」

第一次マリアナ沖海戦はこうして終了した。
日本軍の損害。

戦艦はるな、きりしま、やましるの三隻。
航空機損失。

攻撃時に烈風攻撃機タイプ十五機喪失。
戦闘機タイプは全機帰着。
人員損害15名。

戦果、

アメリカ正規空母、ヨークタウン、レキシントン、ホーネット撃沈。

撃墜グラマンF4F 60機、ダグラスSBDドントレス80機、
ダグラスTBDデバースター・・・。
全機壊滅。損害五十機。

人員損害 パイロット190名、搭乗員180名。
母艦乗員約6000名。

大国アメリカでもパイロットの損害は軽くは無かったが、それに気
づくのは
ベテランが底を尽く頃だったのだ。

第一次マリアナ沖海戦 その弐（後書き）

第一次マリアナ沖海戦終了です。

日本の目的は勝つ事ではありません。

負けない事なのです。

そのためには卑劣と思われても、敵の嫌がる行動を取り続けます。

帰国（前書き）

アメリカ側の帰国模様です。

帰国

我々は勝ったのだ……ろうか……。

多くのパイロットを喪い貴重な母艦を喪失したが、敵の大戦艦をまたも三隻も撃沈。

ジャップの新聞を見たが、戦艦ヤマシロ、ハルナ、キリシマの三隻だったらしい。

我々が撃沈した戦艦は。

おかげで太平洋から大半のジャップのビッグガンが消え失せた……ハズだ。

だが私は気が晴れない。

あの巨大な戦闘機の幻影が消えないのだ。

アレは凄まじい破壊力を持った。

戦闘機なのに、魚雷は投下出来る。急降下爆撃は出来る。

そしてあの運動性だ。

我々のワイルドキャットよりも身軽に動けるのだ。

アレだけの巨体で。

一日も早くアレ以上の戦闘機を開発しないと、また我々の空母は塩水の中に叩き込まれてしまう。

「大統領、何とか勝ちましたね。

おめでとうございます。」

「ハル。めでたいと言えるか？

確かに戦艦を5隻も撃沈したのは偉大な戦果だが、フィリピンは落とされる。

空母は壊滅すると、どうも我々の負けみたいだ。

生き残りのパイロットの証言を読んだか？」

「いいえ、まだ私の手元には届いておりませんので。」

「ここにある。」

読んで見たまえ。」

ハルは大統領から書類を渡され、黙って黙読を始めた。数刻の後……。

「大統領、深刻な事態ですね。」

この巨大な戦闘機とは我々の未知な戦闘機でしょう。」

「その通りだ。戦闘機のみならず、爆撃も雷撃もこなせるとは。我々の持つ戦闘機では絶対に出来ない芸当だぞ。」

「相当に強力な発動機を搭載してるのでしょうか。航空機開発局に問い合わせて見ます。」

「急げ。もう戦争は始めてしまったのだ。」

私は艦政本部に空母の増産を叱咤して来る。」

ルーズベルトは空母の増産を急がせ、ハルは航空機開発局に強力な馬力の戦闘機開発を

叱咤した。

彼等の話では、戦闘機でも爆撃は可能だが、雷撃は難しいと言う。超低空で安定しないとと言う事らしい。

だが日本の戦闘機はその芸当をこなしているのだ。出来ないとは言わせない。

アメリカ側も新鋭戦闘機の謎を何とかしたいと考えたが、敵の出没地域はすべて海上なのが、不味かった。

例え撃墜出来てもすべて海没してしまうのだ。
破片も入手出来ない。

コチラの作戦区域には日本軍は絶対に侵入して来ず、敵地に侵入すると袋叩きにされてしまう。

日本側はこの戦争を国防戦争と名付け、フィリピンのみは開放したが、その他の地域には

一切手出ししないと世界に宣言してしまった。

世界の目は我が国に厳しくなってる。

「大統領、どうも世界の目が我々に厳しいみたいですね。」

「当たり前だ。不意打ちで敵の戦艦を撃沈したのが世界に知られてしまったのだ。」

だがもう時計の針は元には帰らぬ。

開始した戦いは勝利するまでは止められないのだ。」

「その通りです。」

日本の諺にこの様な諺があります。

勝てば官軍。

何でもメイジイシンで幕府が新政府に敗北した時に出来た諺らしいです。」

「そうか・・・。」

では我々がカンゴンとなれば良いのだ。

いい話を聞かせてくれたな。」

「いえ、私は偉大な大統領を補佐するのが仕事です。」

さて、我々もパイロットの育成と軍備増産に励みますか。」

だがパイロットの増産はどうも厳しいらしい。

熟練パイロットが壊滅してしまったのだ。

先日の戦いで。

僅かに残ったパイロットも戦闘機乗りは殆ど居らず、爆撃機パイロットも数人。

大半の熟練パイロットが戦死してしまつてたとは・・・。

海軍航空隊のシステムも考え直す時期だな・・・。

「キンメル長官、ハルゼーです。」

「ハルゼーか？入りたまえ。」

「大統領から母艦パイロットの養成叱咤の手紙が来ております。」

「知っておるよ。だがどうやって増産するのだ？

先の戦いで我々のプロパイロットはほぼ全滅した。

戦艦は大量に残っているが、空母は皆無。

敵陣に攻め込むには母艦が必須なのに一隻も無い。

正直、作戦を考える事も放棄したい気分だよ。」

「長官、申し訳ございません。」

私が母艦を守れなかつたばかりに・・・。」

「ハルゼー、あの戦闘機には我々は無力だったよ。

まさか戦闘機が魚雷も爆弾も発射出来るとは。

想像も出来なかつた。フィリピンの同胞を救出出来たのが奇跡と思つ程だ。」

「そう・・・ですね。長官・・・。」

「ハルゼー、泣いているのか？」

「いえ、泣いてなどいられません。泣くのは勝利した時だけです。」

「そうだな。我々は勝たなければならぬ。大統領の話では、パイロットの育成の叱咤。空母の増産を急がせているそうだ。」

「今、稼働の空母は・・・。」

「エンタープライズ、ワスプ、サラトガ、レンジャーの四隻のみ。大西洋もひつくるめてだぞ。アッチも空にする訳にも行かない。それ以外は護衛空母だけだ。」

「この四隻は絶対に守らないといけませんね。」

「ウム。防空陣形の研究を急がせる。」

「敵は戦艦こそ喪いましたが、空母は全て健在。ジャップの言葉を信じるならコチラの勢力圏内に攻め込む事は無いでしょうが、

コチラから攻め込む事も今は出来ません。」

「だから空母が必要なのだよ。時間は無い。とにかく出来る事から片付けてしまおう。」

アメリカは名目上は勝利してるにも関わらず、敗北気分が蔓延して

ただ。

そして戦闘機開発の叱咤。

パイロット育成の叱咤と叩きまくってた。

だが彼等はまだ知らぬ。

空母パイロットがいかに貴重な宝石同様の価値を持ってたと言う事を。

大国アメリカと言えども、空母パイロットは育成が厳しいのだった。

帰国（後書き）

アメリカ側の内情です。

母艦パイロットは本当に育成が厳しいと思います。

陸軍のパイロットなら飛んで戦って着陸出来たらOKですが、

母艦パイロットは着艦と言う仕事、発艦と言う仕事。

そして海の上を飛ぶと言う仕事があります。

海を飛ぶと言うのは予想以上に難しい仕事です。

これに気づくのは末期の頃ですが。

空母の残存数を勘違いしておりました。

訂正しておきます。

天皇陛下（前書き）

機動部隊が帰国し、天皇陛下に事実のみを報告します。

天皇陛下

主人公なのに影が薄いGです。

いいですよ。コレで。

我々に光が当たるのは好ましくありません。

我々は縁の下の力持ちで良いのです。

さて、山口機動部隊が帰国しました。

本当に演習通りの結果を持ち帰ってくれ、さすが山口さんと感嘆しています。

「多聞丸、ご苦労だったな。

被害も少なく、見た目での戦果は派手では無い。

まさに我々の求めてた戦果通りだ。」

「いえ、高野司令長官の命令が適切だったからです。

そして我々現場の人間のやり易い命令も下して頂けました。

もし、「殲滅せよ。」とかの命令が入ってたら、被害は数倍は大きくなってたと思います。」

「山口長官、我々は負けない事が最大の目標です。

そのためには途中の戦果は程々で良いのですよ。

とにかく敵に浅くも深い出血を負わせる事が、最終的には講和にと繋がるのです。」

「Gくん、君の言うとおりだな。

アメリカは強大な国だ。一つの国で複数の国と戦える国力を持つ国だ。

アメリカに勝つのは今の日本でも難しい。

例え技術や兵器で勝ってても、数の力で押されたらいずれは敗北するだろう。

だが我々の目的は平和的講和だ。

勝利する事では無い。」

「その通りだ。多聞。

いかな強大な国力を持つアメリカでも海軍パイロットだけは簡単に量産出来ぬ。

いいか。

絶対に敵陣に引き込まれるな。

コチラの懐に敵を呼び込み、少しずつで良い。

敵のパイロットを殺るのだ。」

「艦載機のパイロットは一年やそこ等では量産出来ませんからね。

国土の防衛線も日本の国力に合わせた広さです。

これなら勝てはしませんが、負ける事は無いと思います。

兵器も現時点では世界の最高峰なのがありますし。」

烈風は日本軍のスカイレーダーとして長く使われる名機となつてたし、

後継機のジェット戦闘爆撃機も既にスタンバイしてた。

烈風が劣勢になるまでは前線には出さないが。

「多聞、次はお前では無く、小沢に任せるぞ。」

「ハッ、次は戦艦の出番ですね。」

「ウム。日本戦艦に敵艦が壊滅されれば敵は戦艦の増産に励むだろう。」

そしてまた航空機に拠る作戦。

敵に狙いを定めさせるな。迷わせる。」

「了解しました。高野司令長官。」

そう。。。

次は戦艦同士の決戦と決めてたのだ。

陸奥、長門、霧島、榛名、山城。

そして武蔵、大和とすべて長40センチ砲を搭載して生まれ変わらせた。

砲身を伸ばし、装薬の威力を増し、弾を延長した新型砲はかつての大和の46cm砲の

破壊力を上回ると予想されてた。

ほぼ直角にも上げられるため、高高度を飛ぶ航空機も迎撃出来る優れモノだった。

アメも驚くだろうな。

戦艦を5隻も始末したハズなのに、新型戦艦がゴロゴロ出て来るのだから。。。

所変わって、ここは皇居の天皇御前。

高野司令長官は陛下に戦果の報告に来てたのだ。

かつての大本営とは違い、事実のみを陛下に入れる事に拠り、陛下の心境は

完璧に海軍寄りとなっていた。

「陛下、以上が我が機動部隊が潰した戦果です。

多くの敵兵を殺害した罪はすべて私にあります。

講和が決まりましたら、私を戦犯として処理してください。」

「高野、それは間違っておるぞ。もし戦犯として高野が裁かれるなら、朕こそが戦犯として裁かれるべきだ。」

高野は朕の代わりに戦ってくれてるだけの兵士、我が国の民だ。」

「陛下、有難き言葉ですが、誰かが始末をつけないとアメリカと言う国は黙らないでしょう。」

陛下は日本に取ってかけがえの無い大切な方です。

どうか汚れ仕事は我々軍人にすべてお任せください。

陛下には今後も大切な仕事が残ってるのですから。」

「……高野、済まぬ。」

この無力な朕を許してくれ……。」

「とんでもございません。陛下。」

我が国は陛下が居るからこそ纏まっているのです。

どうか陛下は憐れとして、帝國臣民を見守ってください。

我々は少しでも早く講和が出来る様に努力致します。」

「頼むぞ。高野。」

今後も期待しておる。」

陛下への報告が終わると同時に国民への報道が認可された。

苦戦、敵、米国は強大なり。

我が国の戦艦、山城、榛名、霧島を喪失せり。

敵側の出血も膨大ではあるが、我々も負けてはいられぬ。

なをフィリピンは開放せり。

すべての在比米軍は駆逐。」

比島国民は戦火が遠のき喜びの声が上がりつつあり。

そして戦死者のすべてが掲載される。

戦艦の喪失戦死者はすべて、本当は戦前に物故してた故人。

本当の戦死者は攻撃時に被爆、戦死したパイロットのみ。

敵国アメリカにもこの新聞は入手され、アメリカ側は誇大な戦果として国民に報告。

膨大な国債発行のネタとして・・・。

天皇陛下（後書き）

段々Gと高野の狙いが見えて来たと思います。
次回の戦いは戦艦同士のバトルです。

戦艦出撃（前書き）

いよいよベールに包んでた戦艦部隊が出陣します。

戦艦出撃

撃沈扱いとしてた戦艦ですが、チツは沈んだのはニセモノでした
テへ

Gです。

山城も霧島も榛名も改造が終わりました。
新造した方が早かったかも知れませんが、日本は貧乏国家。
使えるモノは最後まで使うべきです。

ましてや戦艦は今回が最後の出番となるでしょう。
華やかに戦って、敵に大出血をしてもらいませう・・・。

榛名、山城、霧島ではさすがに不味いので、それぞれ・・・。

高千穂、河内、桜島と微妙に関係のある名前に改名し、配備した。
ちなみに薩摩と札幌は先の第一次マリアナ沖海戦でデビューしてま
す。

そして・・・。

「大和と武蔵は凄いな・・・。」

「高野長官、彼等は今後は防空陣の壁となるのです。
これでも足りない位ですよ。」

大和と武蔵が同時に配備されたのだ。

高野さんも出陣したいと騒いだが、指揮官が前線に出て戦死でもし
たら大事。

指揮官先頭は過去の事です。

指揮官や参謀は出撃までのお膳立てが仕事なのです。

栄光はすべて前線の兵士のモノですよ。
高野さん。

「そうだな。Gよ。」

オレが間違ってた。彼等の帰る母港や国を守り、指導するのが我々の仕事だ。

戦果を上げて帰る彼等に名誉も与えぬとな。」

「その通りです。」

史実のGは我れ先にと自分の栄光としてましたが、我々は違います。戦果はすべて彼等の栄光とし、名誉を与えるべきです。

特にエースと呼ばれる事になる歴戦搭乗員は新聞やニュース映画でどんどん取り上げるべきです。

それが後の海軍の底力にもなります。

優秀な若者もこぞって我々を支持してくれると思います。」

「その通りだ。」

彼等の乗る航空機の防弾や脱出装置の開発は進んでいるか？

彼等も神では無い。不意を衝かれれば撃墜される事もあるう。

その際にコチラの不手際で彼等を愛機と共に喪う事だけは決してしてはならぬ。」

「大丈夫です。」

既に簡易脱出装置も配備しました。

被弾して操縦困難となった場合は最初に風防を飛ばし、次に座席と共に彼等を脱出させる事が

可能となっています。」

「誤爆は無いだろうな？」

「出撃前に必ず点検を義務付けております。

点検は専任の整備士が受け持っていますので間違いはありません。」

「絶対にナアナアにはさせるな。

人間は慣れるとナアナアとなってしまう事が多々ある。

搭乗員の命の綱だ。

絶対にナアナアにはさせるな。」

「モチロンです。彼等は五重もの監視体制で見張っております。

手抜きしたら懲罰房行きです。」

「それなら良い。

先の開戦では数人はエースが出ただろう。

彼等を表彰してやらないとな。」

「次の作戦が終わったら落ち着くでしょう。

表彰すると共に内地での教育航空隊に配備して彼等も休ませてあげましょう。」

「任せたぞ。G。」

高野長官と色々と話していると、大和を含む大戦艦部隊が柱島を出撃して行く。

壮大な軍艦マーチと共に。

旗艦大和のブリッジでは小沢司令長官が高野司令の乗る駆逐艦に敬礼をしてた。

見えるとは思えぬが、それでも上司は敬うべき。

今回の作戦は戦艦同士でのガチでの殴り合いだ。

良くもこんな作戦に私を投入して下さった。

今回の作戦で散る事になろうとも、この小沢治三郎、地獄に落ちても後悔は無し。

まさに我が生涯の最高の出来事となろう。

だが負けるとも思えぬ。

鉄壁の防空陣を山口多聞中将が約束してくれる。

そしてこの大戦艦の群れだ。

艦隊決戦は恐らく今回が最後となろう。

その後の戦艦の仕事は、空母の壁だ。

国の壁だ。

壁となる前にこの戦いで少しでも彼等の誇りを上げておかないとな。頑張れよ。大和、武蔵。そして改造した彼等よ……。

「小沢長官、敵は出て来るでしょうか？」

「出て来るよ。今回は派手に無線も出し、グアム攻略に向かうと宣言してるのだ。

もちろんグアムなど要らないがな。」

「ごもつともです。敵地を占領しても作り直し兵士の捕虜を取る事が時間の無駄。」

「その通りだ。

捕虜を取っても彼等は戦後、絶対に騒ぐそうだ。

卑劣なジャップに屈辱の捕虜生活をさせられたとな。

それなら一人の捕虜も取らなければ良い。」

米軍兵士の彼等の未来は海底の魚のエサと漁礁となるのだが。それは先の事で……。

大和、武蔵は行く。

敵の戦艦を滅ぼすべく。。。

戦艦出撃（後書き）

海戦はグアム沖の予定です。

ようやく戦艦を前面に出せます。

K I I I J a p (前書き)

いよいよアメリカが勘違いな戯言を世界に放ち始めます。

K I L L J a p

ジャップがグアムを攻略すると諜報部からの通信が入った。何でも大量に撃沈された戦艦の仇を取るべく作戦だそうだ。

面白い。

空母は喪ったが、戦艦はすべて無傷。

空母は戦闘機のみ護衛空母で出し、敵の「アラン」から戦艦を守護させよう。

(アメリカでのコードネームで烈風をアランと総称する事になりました。)

「ハルゼー、遂にジャップが本隊を出撃させたらしい。次はグアムだぞ。」

「トラック島は我が軍が占領しましたからね。恐らくグアムを奪ってトラックを取り返す気でしょう。」

「だがF4Uで大丈夫か？
まだ採用されたばかりの戦闘機だろう。」

「アランに対抗するにはパワーが必須です。
グラマン社のケツを叩いています、
XF6Fがラインアウト出来るまで、まだ時間が必要らしいです。」

「悠長な事は言っていられないぞ。早くF6Fが採用されないと、我が軍のボーイが
すべてアランに消されてしまうぞ。」

試作機でも構わないから、部隊に寄越せと恫喝しろ。
戦争は始まっているんだ。」

「アイアイサー。」

史実でもF4Uは艦載機として活躍出来るまで相当の時間が要りましたが、

この世界でも同様です。

F4Fでは烈風に対抗出来ないと悟った米軍側は試作途中の

F4Uをすべて機動部隊に持ち込んだのです。

それがさらなる悲劇の元になるとは知らずに・・・。

「ジャン、このF4Uって戦闘機、パワーはあるんだが艦載機には不向きじゃなーよな。」

「ボビー、オレもそう思うぜ。」

F4Fはパワーは無かったが、見張りは楽しし着陸も着艦も楽しかった。

だが、このコルセアだっけ？

この戦闘機はパワーがある分、発艦が難しい。前が良く見えないから着艦も難しい。

プロが揃ってたら戦力となるだろうが。」

「俺達みたいなターキーではな・・・。」

「アランに遭う前に水漬けになってるだろうよ。」

力なく笑いあう彼等だったが、次の訓練でボビー少尉はコルセアのトルクに振り回され、

発艦に失敗。

海に墜落し機が爆破。
まさに水漬く屍と消えたのである。

「キンメル長官、大変です。」

「どうした、ハルゼー。」

「採用したF4Uですが、事故が続発して既に三十人も殉職しております。」

「ナニ???まだ一ヶ月も経っていないのだぞ。採用して。」

「パワーを使い切れないターキーばかりなのが難らしいです。着艦の事故も続発しています。」

「だがどうするのだ?F4Fではアランに対抗出来ないのだろ?」

「どうでしょう。F4Uをグアムに配備させ、陸上で運用させたらと思います。」

「我がガンシップはどうやって守らせる気だ?」

「F4Fだけで守備させるべきと考えております。撃墜は考えず、守る事だけに徹しさせればターキーボーイズでも戦えると思います。」

「フム……。F4Uが使えない現状では仕方ないか……。」

航空機会社には艦載機の事故の詳細を伝え、新鋭機の欠点を修正する様にさせる。」

「アイアイサー。」

続発する事故に耐えかねて、すべての艦載機はF4Fに戻された。だが喪ったパイロットは帰って来ない。

一番のベテランパイロットでも戦場を経験したパイロットは皆無なのだ。

すべて先のマリアナ沖の海戦で戦死するか、負傷で退役を余儀なくされてたのだ。

「ハルゼー、我が軍のボーイズは本当に下手ばかりになったな。」

「情けない話ですが、事実です。

あつ、まただ・・・。」

彼等の目前で着艦体制に入ってたF4Fが艦尾に激突。火炎と共に若者が火達磨となってしまうたのだ。

「ジャップを火達磨にする前に我が軍のボーイズにマザーが火達磨にされそうだな。」

「冗談と言えないのが本音です。」

事故は続発してたが、迫り来る日本軍の脅威には待ったはかけられない。

訓練も程々にして、アメリカ機動部隊はパールハーバーを出撃した。コルセアは輸送船に船積みされ、グアムとトラック島に配備される事になった。

「小沢長官、内地からの暗号無電です。」

「ウム、読め・・・。」

「サクラサク。」

「分った。遂に連中も出たのだな。」

「その通りです。」

「ヨシ、全部隊第一警戒態勢に入れ。潜水艦と哨戒機は見つけ次第
始末させる。」

全艦艇は装薬を実弾にし、何時でも撃てる体制にしる。」

「了解です。」

（サクラサクは使い捨ての一度限りの暗号です。

敵が真珠湾からグアムに向かったと言う意味にしておきます。）

日米双方の主力部隊が激突するのは、もう間もなくである・・・。

K I I I J a p (後書き)

コルセアは艦載機として採用されるまで多くの事故を実際に起こしています。

特にパワーを使いこなせないルーキーばかりの現状では、離陸も難しいと思います。

千馬力ならともかく二千馬力は急激なトルクがかかると、機首が振り回されるらしいです。

次回はいよいよ戦艦同士の激突です。

激突（前書き）

遂に日米双方の戦艦が激突します。

激突

Gです。

布哇在住のスパイからの報告でアメリカ艦隊が遂に出撃したそうです。

今回は戦艦をすべて出すみたいですね。

フフフフ。楽しみです。

私の妄想がすべて実現出来た新鋭艦隊に驚く彼等の顔が……。

「長官、もうすぐ作戦海域に近づきます。」

「ウム、総員に訓示をする。マイクを持って。」

「ハッ、ただ今準備します。」

数刻後、全艦隊に小沢治三郎長官の訓示が同時放送された。

「諸君、いよいよ待ちに待った艦隊決戦だ。

前回の戦いでは撃ち漏らせた敵戦艦をも壊滅させる時が来たのだ。

既に十分な訓練も積み、特性にも慣れたと思う。

命令通りに従え。

そうしたら勝利は我々のモノだ。

艦載機パイロット諸君、護衛は頼んだぞ。

一機も敵を艦隊に近づけるな。

以上だ。」

小沢長官の訓示放送が行われてる頃、丁度アメリカ艦隊も訓示放送をしてた。

「我が精強なるアメリカンボーイズ諸君。
今度こそは敵のビッグガンを壊滅させるのだ。
既に5隻も撃沈した我々だ。
残る敵艦は壊滅出来るだろう。
撃ち果せ。
敵を生かして帰すな。」

艦載機に不安は残るモノの、全てのビッグガンを連れて来たのだ。
よもや負ける事はあるまい。

既に全ての戦艦の発注はキャンセルされ、キャリアーの発注に挿し
変えられた。

我が合衆国も潤沢な予算では無い。

壊滅した空母を優先するのも当然だろう。

だが、どうしても不安は残る。

何故、空母を壊滅出来た敵が戦艦を見逃したのか・・・。

その時は知らなかったが、ヤツ等は戦艦は戦艦で処理出来るから見
逃してたのだ。

後にオレは二度目の海水浴を楽しまされる事になった時にようやく
気づいたのだ。

ヤツ等に騙されてたマヌケだった事を・・・。

そして日本側・・・。

「長官、レーダーに拠ると、今夜夜明け前には敵と遭遇出来るらし
いです。

夜間でも勝てると思いますか、どうなさいますか？」

「敵の望む形で戦つてやろう。」

少し迂回し、九時前後に会敵出来る様に艦隊を誘導してくれ。」

「ハッ、お任せ下さい。」

大和を旗艦とする小沢遊撃艦隊は会敵時間調整のため、サイパン北方を迂回、

奇しくも南雲艦隊が壊滅した六月五日が会敵日となったのだ。

(Gクンに聞いた併行世界の我が艦隊壊滅の日が明日か……。今回は作戦の事は全く知られていない。暗号も重要暗号は使い捨ての一回限り。

漏れは無いと思うが、人間完璧は不可能。

常に最悪の事態を想定しておこう……。

それにしても、まさか戦艦を全て指揮出来る日が来るとはな。

これもG情報の恩恵か。

嬉しい出世だった……。)

小沢は高野を通じ、山口多聞と共にG情報を知らされた数少ない海軍将校だったのだ。

「武藤隊長、明日は私達も敵を落とせますかね……。」

「心配するな。弱のお前等も必ず落とせる日は来る。

今は戦闘の空気になじむのがお前等の仕事。

オレの側を離れるなよ。離れたら……。」

「わ、分っています。隊長。

死に物狂いで隊長に食い付いていますから。」

「他の区隊の連中もだぞ。

戦闘中には絶対にオレの指示以外の行動はするな。

オレが指示しなくとも、オレの尻に食い付いて来い。」

その程度の仕込みは出来てるハズだ。
もし勝手に敵に食い付いたら・・・。」

「死んでも離れません。隊長の拳動に細心の注意を払っております。」

「自分のケツも見張れよ。」

「モチロンです。」

先の海戦で、武藤の部下の一人が武藤の妙技に魅せられ、指示を忘れて敵に踊りかかったのが居たのである。

生きて帰れたが、彼の機は穴だらけとなり廃機処分となったのだ。

そして病院から出た直後、武藤から配置ナシとされ、整備士に落とされたのだ。

空母の整備士の大半はチツはパイロットの卵が多数居るのである。

戦闘には使えないが、機の構造を積極的に仕込むため、

作戦中は整備士として乗艦してたのだ。

それを知る部下は絶対に武藤の指示を無視しないと誓ってたのだ。配置を無くすと中々正規パイロットには戻れないのだ。

岩本小隊も部下に指示を与えてた。

「スギ、お前は中々筋は良い。
だが慢心するなよ。」

お前が死ぬのは勝手だが、

お前を仕込むのに国費が何十万もかかってるんだ。

元を取るまでは勝手に死ぬ事は許さぬ。

いいか。」

「ハイ。隊長。」

「ウム、良い返事だ。いいか。空では即、返答しろ。今後もずっとな。」

「お前が部下を持てる身分になった時でも、絶対に甘えさせるな。隊長の指示に従えない部下は殴りはしないが、配置が無くなるぞ。特に艦載機パイロットは枠が狭いからな。」

「名誉ある赤城戦闘機隊、

岩本分隊から降ろされるなんて死ぬよりもイヤです。」

「それなら地上でオレ達が指示したり指導した事は空に上がっても絶対に忘れるな。」

「一年頑張れば、お前も三番機からカモ番位にはなれるぞ。」

「じ、自分が名誉あるカモ番機ですか・・・。」

「ああ、分隊の要、カモ番機だけは下手には任命したく無いからな。」

「頑張ります。絶対にカモ番になれる様にします。」

「ウム。」

（この世界の日本海軍航空隊はロット形式の編隊が普通となった。隊長は一番機、二番機は隊長に次ぐ次席パイロット。

三番機は一番下手なルーキー。そして通称カモ番機と呼ばれる四番機の位置はルーキーに取っては憧れの配置だ。

見張りを任される重要な配置であり、隊長から信頼されたと言う証

明でもあるのだ。」

「隊長は大陸での義勇軍参加経験があるのですよね。」

「ああ、内戦に絡んで戦いの練習にはなったが。」

「口助の戦闘機はどうでしたか？」

「的だったな。」

速度も違えば速度も違う。

油断はしなかったが、被弾も無かったから、まあ自分の技術には確信を持てたぞ。」

「やはり・・・。」

「ウム。」

見張りを嚴重に行い、高空からの一撃離脱だ。

複葉機時代のドッグファイトは非常時以外は絶対にしてはならぬ。

ドッグファイトに陥った時点で自分が他機から狙われてると覚悟しろ。

訓練での捻りこみとか曲技飛行は緊急時のための訓練と思え。

対戦闘機戦闘は見張りに始まり見張りに終わる。

ただ見るだけではダメだぞ。

そうだな。

カンも鍛えておけ。ハエや蚊が居たら絶好の練習台だ。

いいか。ハエや蚊を見かけたら敵だと思え。

そして敵を自分の手先に誘導したり待ち伏せしろ。

それが出来たらハエや蚊など、片目でも簡単に捕らえられる。

逆に言えばそれ位も出来ない人間は戦闘機パイロットには向いてお

らん。

輸送機か爆撃機の馬車引きに転向させる。
分ったな。スギ。」

「分りました。隊長。」

後に岩本、西澤、坂井に続くエースとなる杉田庄一の若き日の話である。

いよいよ明日、早朝は艦隊決戦の日。

時は昭和17年、6月4日。

激突（後書き）

杉田に岩本が指導する話はフィクションです。

激突 その巻（前書き）

いよいよ戦闘開始です。

激突 その巻

6月5日の夜は明けた。

いよいよ戦艦同士の対決。

巨体の競演が始まるのだ。

小沢は昨夜から司令塔でまんじりとも出来ず、仮眠のみを取ってた。今日は長い日となろう。

オレも死ぬかも知れぬ。

だが海軍軍人として誉の日だ。

例え塵となろうとも、我が軍人生活に一献の悔いもナシ。敵も同じであろう。

0500、総員起こしをかけたが、寝坊をする兵士は皆無だ。

すべての兵士は時間と共にハンモックを畳み、可燃物をすべて艦底に運び込み、

戦闘準備も万全となってた。

「長官、レーダーの距離に拠りますと、大体九時には会敵出きる見通しです。」

「ウム、見事だ。良くぞ想定した時間に艦隊を誘導出来たな。」

「我々の仕事ですから。」

「俺達の仕事もあるな。」

「長官の仕事とは・・・。」

「責任を取る事だよ。多くの戦死者も出るだろう。損害も出る。」

その責任はすべて俺にあるのだ。

長官の役職は飾りでは無い。

責任を取るためにあるのだ。」

「・・・長官、一人で背負わないでください。

我々も付いています。」

「頼むぞ。艦長。」

大和のブリッジで小沢と有賀艦長が雑談してる頃、アメリカ艦隊も戦闘配備に付いてた。

「諸君、今日は長い日となろう。」

我々も命を掛けて戦う。諸君も我々に力を貸してくれ。」

キンメル長官は、今日が自分最高の人生の日になると思った。

空母の運用では日本に負けたが、

戦艦同士の対決ならビッグガンを多く備えた我々の勝ちだ、と。

だが戦いに絶対は無い。

使えるカードはすべて使おう。

相手も強力な海軍の国だ。

恐らく我が軍とイギリスを除くと世界のBIG3は紛れも無く日本だ。

平時ならともかく、今は戦時。

相手を舐めてかかると先の海戦の如く、我々が海水浴を味わう事になるだろう。

ジャップは強い。

そう思つて戦うべきだ。

既に司令要員はすべてオペレーションルームへと移動してる。

私はどうしよう・・・と考えたが、ココで戦いを見守ろう。

すべての準備は終わった。

後は結果を待つのみだ。

私はキンメル。

太平洋艦隊司令長官だ。

戦艦部隊の数キロ後方では烈風部隊が飛行甲板で発進準備に大忙しだった。

本日はすべての烈風が戦闘機仕様。

弾薬は満載。燃料も予備タンクを含め満載。

既に哨戒機は発艦して警戒に入っている。

常時滞空任務を切らさないために一時間間隔で戦闘機を中隊ごとに発艦させた。

待つ身は辛いが、僅かな隙を狙われ、母艦か戦艦が本番前に撃破されたら目も当てられない。

パイロットはコックピットで待機しながら弁当を食べ茶を飲んで、用を足しに降りたりしてた。

やがて・・・。

「待機戦闘機隊。全機発艦せよ。敵戦闘機部隊接近中。」

遂に戦闘機が近づいて来たのだ。

爆撃機も居ると思おう。

各自カタパルトに移動し、数分後には全機が発進完了し、六千メートル上空で待機してた。

ココで説明しておこう。

この頃には戦闘機を含む全ての航空機には高性能無線が搭載されていた。

田中実の世界では不要となり、捨て値で売られる事も多くなった過去の遺物。

パーソナル無線だ。

灰色男が全て持ち込んでくれたのだ。

おかげで敵に傍受される事も無く、気軽に会話が楽しめる。

部隊や司令部からの連絡はモチロンオール0のCQナンバーだ。

雑音も少なく、取り扱いも容易なのでパイロットからも好評だった。

その無線に艦隊司令部から通報が入った。

「滞空戦闘機部隊に告ぐ。

間もなく敵戦闘機が約二百機、艦隊上空に接近する。

各自戦闘機隊長の指示に従い、敵を殲滅せよ。

良いか？

殲滅を指令する。」

戦闘機隊員の皆の顔は歓喜に満ち溢れていた。

烈風の能力を使えば、殲滅も難しくは無い。

だが今回は初めて、殲滅命令が出たのだ。

嬉しく無い訳が無かるう。

「各分隊、指令は聞いたな？

殲滅命令が出た。

相手はワイルドキャットだろうから難しくは無いと思う。

だが油断するな。劣性能の機でも凄腕のパイロットが乗る戦闘機は化ける事も多々ある。

各区隊長の指示に従い、列機は戦え。

編隊の維持は崩しても構わないが区隊は絶対に崩すな。

特に三番機は必ず隊長に食い付け。

指示以外の行動を取るヤツは着艦次第独房に叩き込むからな。」

岩本隊長から恐ろしい命令が出たのだ。

だが杉田は彼の命令に慣れてたせいも、驚く事も無かった。

現時点での太平洋戦域最高の撃墜数を誇る隊長の指示は絶対だ。

隊長の戦闘は華麗では無いが、虎の様な獰猛さと狐の様な狡猾さ、豹の様な俊敏さを

兼ね備えた戦闘をされる。

戦いに絶対は無いと言われるが、隊長が余裕を持って指示されてる間は我々は勝ってる。

まだキャリアの浅い杉田だが、岩本には心酔してたのだ。

「よーし、スギ。

そろそろ攻撃開始するぞ。

各区隊、オレが突っ込めと言った瞬間に殴りこめ。

絶対に機動を緩めるな。

もし食い付かれたら教えた通りにフットバーを蹴飛ばして機を滑らせる。

撃たれる寸前にだぞ。分ったか？」

「了解です。隊長。」

「ウム。……。」

見えたぞ。。

全機、開け……。突っ込めえええ。。。」

岩本の指令一過、全ての烈風が金切り声を上げグラマンに向かって踊りかかる。

狩りの時間の始まりだった。

「ボビー、オレ達のF4Fでアランに勝てるかな・・・。」

「考えるな。まずは撃墜されない様にしろとの命令だったろう。とにかく我々の機はアランに劣るのだ。」

逃げて逃げてかき回そう。」

「ああ、そうだな。トニ・・・。」

「ボビーどうした？ゲツ・・・。」

アランが上から降りて・・・。」

ボビー達の乗るワイルドキャットの群れに烈風の大群が急降下で踊りかかって来たのだ。

経験が豊富なパイロットなら交わす事も可能だったろう。

だが彼等は初陣ばかり。

隊長すら飛行学校を卒業したばかりだったのだ。

一撃目で十数機は叩き落されたが、その後も被害のみが続出。

反撃も出来ずに全てのワイルドキャットが波に消えるのも長い時間はかからなかった。

数機は雲に逃れ助かりそうだったが、台南から空母龍城に転任して来た坂井が見逃す事も無く、仕留めてしまった。

「こちら坂井一番。雲に逃れようとしてたF4Fは殲滅せり。」

「コチラ岩本一番、坂井さん、ありがとう。」

「坂井一番です。岩本さん、見事な指揮でした。敵は殲滅ですね。」

「ウン。被弾すら無かった模様です。」

「……、そうですが。では私達は母艦の警備飛行に戻ります。」

「ご苦労様でした。コチラ岩本一番。」

「サブちゃん、内地で一杯おごるからな。コチラ金ちゃん。」

「金ちゃん、楽しみにしてるぞ。コチラ、サブ。」

日本艦隊上空から死の匂いは消え失せ、全ての米軍機は空から消えた。

技量と性能に格段の差があったとは言え、完璧なワンサイドゲームとなってしまうた。

キンメルは必死で彼等呼び続けたが、彼等は全て波に消えたのだ。既に砲戦距離に近づいてたため、逃走する事も適わなくなってた。キンメルは戦闘機を呼ぶ事を諦め、海戦準備に備えてた。

激突 その壱（後書き）

坂井と武藤は実際にこんな呼び方をしてた親友でした。

岩本とは配備された部隊が違うので他所他所しいですが、後には仲良くなります。

次回は海戦です。

砲戦距離 45000(前書き)

いよいよ本番です。

砲戦距離 45000

。。。。

我がアメリカンボーイズはどうやら全機、殺られてしまったらしい。司令部から度重なる呼び出しにも答える機は皆無だった。もう少し経験を積ませて出すべきだったと後悔している。まあ私も今回の作戦が終わったら、恐らく退役を余儀なくされるだろう。

これだけの戦死者を出したのだ。

責任は取るべきだな。

まあ、それは良い。

まずは目の前の戦闘に備えぬと。。。

キンメルは硬直してた思考を止め、作戦室に電話を入れた。

「こちらキンメルだ。

戦闘機は壊滅したぞ。作戦はどうするのだ？」

「こちら作戦室、レーダーの情報に拠ると、敵艦隊五十キロまで接近中。

回避は不可能と思われる。

よって、敵艦と交戦。

撃破し帰国するのが最良と思います。」

「フム。。。

私もそう考えてた所だ。では砲戦距離に達したら、敵を殲滅出来る様にデータを揃えてくれたまえ。

各砲はすべて鉄鋼弾に変更。

艦上乘組員は砲戦に備え、艦内に退避。
急げ……。」

戦艦アリゾナ、ネバダ、テネシー、ミシシッピー、アイダホ、ニューメキシコ、コロラド、メリーランド。

これだけの戦艦を揃えたのだ。

戦技シュミレーションでも数の法則の前には負ける要素が見当たらない。

日本は既に5隻も戦艦を喪失してるのだ。

残されたのは巡洋戦艦が数隻。

コチラはビッグガンを持つ戦艦が三隻も居るのだ。

負けないぞ。

散ったアメリカンボーイズ、お前等の仇は絶対に私が取る。

「長官、間もなく砲撃可能距離となります。」

「そうか……。では予定通り、当初は三式弾で敵の上層部分を焼いてしまえ。」

情けをかける必要は無い。

射撃方位盤にデータはすべて入ってるな。」

「お任せください。」

まさかこんな戦法が出きるとは……。

海軍に入って本当に良かったと感激しています。」

「任せるぞ。」

「了解です。」

全艦一斉射撃開始。

作戦プランAで始める。」

大和を先頭に武蔵、薩摩、札幌、高千穂、河内、桜島と六隻の長40センチ砲戦艦の咆哮が、今上がるうとしてた。砲戦距離、45000m。

「オイ、ボビー。何か音がしなかったか？」

「ダン、まだまだよ。敵艦は水平線の彼方だぞ。撃つ訳が……。」

ボビー二等兵は最後まで話す事は無く、戦艦アリゾナの甲板で火達磨となってしまうてた。ダンも同時に……。

「司令、大変です。敵が射撃を開始しました。」

「ナニ???まだ45000mも離れてるんだぞ。我々のガンでも35000が限界だ。」

「しかしもう発射……。何だ?アレは……。」

旗艦メリーランド艦上のブリッジから見ると、戦艦アリゾナの上空に何かが飛んで来て、花火みたいに弾けたのだ。そして……。

「燃えている……。アリゾナが炎上してる。」

「長官、コチラにも敵弾が飛来しています。避けないと……。」

「全艦、即座に最大速力を出し敵弾を避ける。アレは……。」

キンメルは最後まで言う事は出来ず、メリーランドのブリッジで説明の如く燃えてしまった。

アメリカ戦艦の艦上はこの世の地獄となつた。

まだ致命傷は受けていないのに、甲板要員は全滅。艦橋も露天部分は壊滅。

戦闘指揮所は艦の奥深くにあるので助かったが……。

戦艦はモチロン、巡洋艦、駆逐艦、そして艦載機を喪失してた空母までが炎上を始めたのだ。

肉の焼ける吐き気のする匂いが戦場を漂う。

反撃はおろか、操舵も出来ない艦艇が続出し、アメリカ艦隊は大混乱となつた。

「凄い……。」

まだ撃沈に至る打撃は与えていないのに、敵は壊滅状態になつてるぞ。」

「長官、全ての照準は完璧となりました。」

まさか外れ弾が多い当初の射撃をすべて三式弾で発射するとは……。

「

「無駄弾が有効に生きるいい見本だな。」

今後の海戦のモデルとなるだろう。」

そろそろ沈めてやるか・・・」

「生き地獄を何時までも味わらせるのは海軍軍人としても不本意ですからね。」

「ウム。全艦轍硬弾にて敵艦を処理せよ。」

ズガン、ズガンと響く発射音と着弾し鉄が引き裂かれる破壊音。そして地獄の底に引き込まれるみたいな船の沈没音が戦場を覆った。

それからはもう完璧なワンサイドゲームとなった。

全ての艦が炎上を続けてるため、巡洋艦も駆逐艦も恐れる事無く敵に接近。

次々と敵を撃沈して往く。

各戦艦も全て落ち着いて射撃を開始。

最初は初弾を受けて炎上したアリゾナが二つに折れ轟沈、

その後は続々と撃沈され続けて行った。

その様子を高空からB17に乗って、視察を続けてたアメリカ陸軍のパイロットは、
後に・・・。

「まるで赤子を大人が痛めつける様な様子でした。

とても戦闘とは思えません。

まさか戦艦の破壊力があそこまで凄いとは・・・。

海軍兵士はすべてあの火山の様な艦で焼け死んだのでしよう。

我々はその後、敵戦闘機に追われ逃げるだけで精一杯でした。」

泣きながらグアム基地に帰った彼等をマッカーサーは攻める事が出

来なかった。

後にアメリカが戦場に救助に行くと、焼けただれた遺体のみが彷徨う地獄の海となった。

キンメルは開戦初期に戦死してたらしい。

「小沢長官、勝ちましたね。」

「勝ったと言うか……。何とも言い難い気分だな。」

「戦場とはこんなモノでしょう。」

「ウム。とにかく我々は勝った。

敵は空母から、また戦艦の有効性を信じるだろう。コレだけの完璧な勝利は世界でも始めてだろう。」

「アメリカで無かったら、今回で戦争は終わりですよ。ただアメリカも本気で反撃して来ると思います。」

「我々も装備と訓練を充実させるべきだ。

今回の戦闘員は全て内地の学校に配備し、戦訓を伝えさせるべきだ。それと……。」

「戦闘機搭乗員のリストは出来上がっております。

彼等は内地に帰還次第、御前で陛下に表彰される事でしょう。」

「ウム。

彼等は我が国の誇りだ。

キチンと働きに応じた手柄を与えぬとな。」

小沢は彼等と語り合つと、戦場から撤収命令を出し、内地にと帰つて行く。

多くの軀を海底に残し・・・。

日本側損害、皆無。

アメリカ側、

参加艦艇壊滅。

戦死者二万有余名を越す大損害となる。

ルーズベルトは敗北を知り、卒倒を起こしかけ入院。

空母の増艦計画は破棄され、戦艦を倍増生産する事になる。

砲戦距離 45000 (後書き)

三式弾を海戦初期に使えば、ナパーム効果で敵の兵士を壊滅出きると
思い、今回の海戦を作りました。

無駄弾となる射撃が無駄にならないのです。

これぞエゴ射撃ですよ。

凱旋（前書き）

英雄達の凱旋です。

凱旋

Gです。

現在、瀬戸内海の柱島泊地に居ます。

間もなくグアム沖海戦で完勝した英雄が帰還するのです。

高野五十六連合艦隊司令長官を始め、すべての参謀が待ち構えています。

「Gよ。」

お前の言つてた作戦が見事に的中したな。

まさか壊滅させてしまつとは・・・。」

「兵士の連度が最高に上がったのが良かったのでしよう。

戦争は準備と訓練と補給、そして作戦と士気ですよ。」

「ウム。今回の英雄の皆には海軍からも出きる限りの報酬を約束しよう。」

「あ、それは出きる限り手柄を上げた兵士を優先してください。

士官は昇進もナシで結構ですが、一般兵士やパイロットは優先してくださいね。」

「ウム。士官は神輿だけだからな。

手足となって頑張つた兵士こそ、国が面倒を見るべきだろう。」

「ニュース映画やラジオでも報道するべきです。

独逸の第一次世界大戦の赤男爵をモデルにしてください。」

「約束しよう。」

日本が負けた原因つてとにかく物量以外には人を大切にできなかった事だよな。

その点は先進国は素晴らしかった。

日本のエースの半分も撃墜しとらんボングが国民的英雄として凱旋してたし、

ドイツなんかキチンと査定もしてた。

あ、ルーデル閣下は別です。

あの方はバトルジャンキーの人外ですよ。

足がモゲても出撃するなんて人間ではありません。ハイ。

さてさて・・・。

瀬戸内海に帰還した艦艇はキツチリ出撃した時と同じ陣容です。

後で聞いた話ですが、アメリカのパールハーバーは墓場みたいな雰囲気半年は続いたとか。

そりゃ壊滅して艦艇が全然居なくなればね。

柱島には陛下も来ると言われたのですが、さすがに謹んでお断りさせて頂きました。

万一の事があれば、海軍が潰れてしまいますからね。

壮大な軍艦マーチに拠って迎えられた連合艦隊は大型艦艇は柱島に。

小型艦艇は呉に入港。

空母のパイロットは全機岩国に着陸しています。

しかし・・・。

日本の下士官は本当に世界最強だったのですね。

先の大戦でも下士官を司令とかに登用してたら、負けはしなかったかも知れません。

それにしてもいかに性能と経験に格差があったとは言え、進撃して来たグラマンを

壊滅させてしまうとは・・・。

そして被弾もナシ。

かのシナ戦線でのゼロ戦の初陣真つ青なパーフェクトゲーム。おかげで海戦も不安無く勝ちました。

史実のGが言つてた戦闘機が強ければ戦争は勝てるだけは事実と思いましたよ。

歴史上でも最大のパーフェクトウインでしょう。

敵には不憫でしたけどね。

戦いに情は無用。

それにしても長40センチ砲の威力は凄まじい。

史実の46センチ砲の破壊力を上回るかも知れません。

後に出て来るミズーリ、アイオワクラスも気をつけておかないと・・。

アレもガチで大和とバトルしたら大和が負けてたと思います。

特に発射速度に差がありますからね。

いかに破壊力のある大和の砲撃でも数を撃たれば、殺られてると思います。

さて・・。

岩国に行きますか・・。

岩国では多くのニューズ映画記者や新聞記者が詰め掛けてた。

海軍広報部の肝いりでエースの彼等を紹介してたのである。

「貴方が今回のグアム海戦で艦隊の窮地を救つた「烈風虎轍」の岩本少佐ですか？

海軍報道部のモノです。」

「空の宮元武蔵と呼ばれる武藤大尉ですか？今回はご苦労様です。」

帝國新聞ですが……。」

等々……。

活躍した彼等を記者がこぞと写真を撮り、話を聞き、海軍報道部から支給された

戦闘時の写真銃映画を見せられてた。

(既にすべての戦闘機に標準で写真銃も装備してます。)

「隊長達は華やかでいいな……。」

「本当だ、俺達も何時かはあんな風取材されるかな……。」

「カモ番にもなれない俺達ではまだまだだよ。」

三番機の若者が話し合ってる所を、私ことGが通りかかったのは、そんな時だった。

「君達こそが今後の日本の要となるのだよ。」

アメリカ力は強大な国だ。今回の敗北程度ではへこたれぬ。

しばらくは静観するだろうが、一年以内には勢力を盛り返して来るだろう。

その時に戦うのが君達だ。

彼等を見習い、未来の日本海軍パイロットの要になれ。」

「し、失礼しました。」

し、少将殿ですか？」

「G少将、海軍戦闘機参謀長を勤めてる。じゃ頑張ってくれたまえ。」

彼等は直立不動の姿勢で私に敬礼をしてくれ、見送ってくれた。

アレは確か、杉田と谷水では無かったか？

期待のエースが参加してたとは・・・。

何としても彼等をエースに育て、日本空軍の底力を上げないとな。

岩本や坂井、武藤クラスは指揮官配置に付くだろうから。

それにしても海軍兵学校が今や経理学校と同じ扱いになるとはね。

クククク。

コレで良い。

別世界の日本海軍の過ちは指揮官ばかり重用してた事よ。

兵士や下士官に頑張らせられる環境を育てなかったから負けたのだ。
特に陸軍は惨かったからな。

この世界の陸軍は完全に自衛隊以下の組織だ。

おかげで無用な赤紙徴兵が無くなり、地方のオヤジクラスが徴兵される事も無くなった。

島とか土地には進駐させていないから、今の海兵隊でも充分に間に合う。

前線はグアム、サイパンの間だから若手パイロットの実戦訓練もサイパンで間に合うだろう。

後は米軍がいつ反撃に入るか・・・だな。

小競り合いの場としてグアムの米軍には頑張って貰おう。

凱旋（後書き）

凱旋しました。

グアムは実史のラバウル航空戦みたいな場となります。

南洋にて・・・（前書き）

ガチバトルばかりでしたので・・・。

南洋にて・・・。

ここはフィリピンの南方、パラオ諸島。

我々は対潜哨戒機、東海のパイロットだ。

名前？？

聞いてもすぐに忘れられる存在だ。

仮にAとでも呼んでくれ。

我々の任務は毎日の様に決められたコースを低空で周り、海底の調査と未確認物体の

破壊が任務だ。

上空には常に護衛のゼロ戦が付いているので、安心とまでは言わないが、ま、大丈夫だろう。

今日も0800にコロール島基地を離陸。フィリピン、パラオ、マリアナ諸島間の三角飛行。

東海は全木製の飛行機なので、潜水艦調査には向いてるらしい。

退屈だがとても大切な任務。

間違っても敵潜水艦に絶対哨戒圏に入られてはいけないのだ。

我が国の生命線とも言つべき、南方と欧州との交易が成り立たなくなる。

この圏内には友邦国の潜水艦は浮上して航行を義務付けられている。日本もだ。

拠つてこの圏内を潜水してる潜水艦はすべて敵。

確認ナシに撃沈が許可されている。

今日も偵察員は磁気探知機と睨めっこ。

ソナーに探知があつた場合は深度を確認し雷管の調整をしてブチこむ・・・。

それが俺達の仕事よ。

しかし中々敵さん来ません。

こつも毎日スカばかりだと、たまにはドカンと殺りたくなりますわ

い。

「B 何か反応無いか？」

「Aさん、聴かないでくださいよ。コッチも反応無くて困ってるんです。」

「たまにはオケラで帰りたく無いよな。
毎日オケラでガソリンの無駄遣いしてる気がするぞ。」

「私達の仕事は平和が一番なんスよ。
下手に大量の敵……。」

「B どうした？」

「静かにしてください。今、沈没船以外の反応がありました。」

「分った。頼むぞ。」

「ハイ……。」

それから数分、Bはヘッドホンとモニターに集中し、確かに沈没船とは違う鉄の船の反応を探り当てたのだ。

この海域には我が軍の潜水艦は一切居ない。
特に哨戒海域には近寄らない様に通達してあるのだ。
掘って、これは敵……。

「Aさん、一発だけ爆雷を投下してください。」

「ここの水深は1000ですので、80をお願いします。」

「おお、ヨッシャ任せろって・・・。
オイ、C、お前の仕事だろうが。
オレは操縦してるのだぞ。」

「へ・・・、すみません。ヒマなので寝てました。」

「バカヤロー、ドンパチが始まるんだ。
とつとと爆雷の調整をしろ。そしてBの指示があり次第投下だ。」

「了解っす。」

ネボスケCのおかげで緊張が飛んでもたが、爆雷の雷管調整はすぐに終わり、

敵艦らしきモノの上空にて投下。

しばらくするとモリモリと海から爆発の水煙が巻き起こる。

命中しとれば良いがな・・・。

しばらくすると、なにやらブクブクと泡を吹いたのが出て来た。

ヨッシャ、命中してたどおお。

銃撃を受けると不味いので上空のゼロ戦に敵艦を機銃で射撃して貰う。

間違いなくアメリカ潜水艦のガトー級だ。

メインタンクを損傷したらしく大量の油を吹いていた。

乗員が対空砲を撃とうとしてたが、舞い降りて来たゼロ戦に投げ射殺。

白旗を揚げようとしてたが、海軍の方針で潜水艦は見た瞬間に殺れとの指令に従い・・・。

250kg爆弾を投下。

燃料を吹いてたタンクが目標。

一撃で火達磨でした。

「オイ、B、今日はお手柄だったな。」

「久しぶりの戦果でしたね。Aさん。」

「C、報告写真は撮影したな？」

「お任せください。ピントバツチリで撮りました。」

上空の護衛ゼロ戦に感謝の無電を放ち、我々は残された燃料分の哨戒任務を続行。

夕刻、疲れた身体と機体をようやく基地に下ろし任務完了。

本日の戦果、ガトークラス潜水艦、一隻撃沈。

その夜は護衛のパイロットも交え、夜半までドンチャン騒ぎだったのは言うまでも無い。

明日は当直明けの休み。

パラオにでも遊びに行こうっと

南洋にて・・・（後書き）

南洋方面で対潜任務に就いてるパイロットの話でした。
国防圏を絞り、その中での潜水は認めない方針です。

パールハーバー（前書き）

壊滅したパールハーバーより。

パールハーバー

ここは太平洋艦隊司令部のあるアメリカ、ハワイ州のパールハーバーだ。

アメリカ海軍の最前線基地と呼んで良いだろう。

だが現在、ココには主が一人も、そして一隻も居ない。

先のグアム沖海戦で壊滅してしまったのだ。

長官のキンメルも戦死。

彼は今回の敗戦が無くても更迭される可能性もあったから、前線で逝けたのは幸福だったと思う。

ハルゼーも同じくグアムの沖に消えたらしい。

何せ参加した将兵すべてが一人も帰って来なかったのだ。

アメリカで無かったら、もう講和になってただろう。

だが偉大なアメリカ合衆国はこの程度・・・とは言えないが、負けてはいられない。

合衆国海軍は降伏の文字は無いのだから。

さすがに今回の敗北はアメリカに取っても軽いモノでは無かった。

卑劣なるジャップはどう言う戦法を使ったのか、すべての艦艇を撃沈してしまったのだ。

おかげで生き残りは全く皆無。

これでは戦訓も作れない。

ああ、忘れていたな。

私の名前はチエスター・ニミッツ。

キンメルの後釜として太平洋艦隊司令長官を拝命して着任したばかりだ。

だが……。

どうやって艦隊を作れば良いのだ???

ニミッツが嘆くのも無理は無い。

真珠湾は空っぽなのだ。

一発の爆弾も受けていないのに、艦隊が一隻も居ない。

各地の工廠はフルピッチで艦艇を建造してるらしいが、これでは……。

当座は大西洋艦隊をフルに回して貰って凌ぐしか無いな……。

大統領も國務長官も国の財政をフルに使って艦艇建造に励んでいるが、

すべてを建造出きるまでには、数年はかかるだろう。

普通の国では。

だが我が偉大なアメリカを舐めてはならない。

この程度なら一年以内には建造を終える。

だが、言葉を変えると一年は反抗作戦が出来ないのだ。

コレは不味い。

幸いにも日本は領土に野心が無いらしい。

フィリピンは一時占領されたが、アメリカを駆逐した後はフィリピン国を認可。

軍も一部の島に駐屯するのみで、フィリピンに返還したらしい。

コレでは卑劣なる国とは言えないではないか・・・
いや、卑劣なのは我々・・・か・・・
宣戦布告前に敵の戦艦を奇襲し撃沈したのだから・・・
今現在、我が国の世界の評判は最悪だ。

敵に不意打ちを行い、卑劣な奇襲で戦時体制に入っていない日本の戦艦を撃沈。

そして二度続けての敗北。

特に今回は完敗だった。

世界の歴史にも残るであろう、完敗記録。

まさか完璧に壊滅されるとは・・・。

国民も今回の敗北には心底呆れてしまい、国に対する忠誠も喪失。

特に海軍の権威は地に落ちたと断言しても良い。

反対に陸軍は評価も高い。

フィリピンの敗北も島民の犠牲も無く、無事に撤退出来たし、

非常時の救援も国民の評価を高めてる。

反対に海軍は予算ばかり使う役立たずとの印象が・・・。

それが噂では無く事実になってるから始末が悪い。

はあ・・・。

こんな時期に太平洋司令長官なんて・・・。

ハア・・・海に飛び込もうかな・・・。

ニミッツが嘆いてる頃、日本では・・・。

「スゲー、この烈風虎轍って人、シナでも義勇軍で戦ってたんだって。」

アッチで撃墜30機で、今回の海戦で米軍機を十機。

戦争が終わるまでには、第一次大戦の赤男爵の記録も確実に塗り替えるそうだって。」

「空の宮元武蔵の方、無骨な顔なのに本が好きな人ですって。いいわねえ。強くて優しい人。」

こんな人のお嫁さんになれたら・・・。」

新聞やニュース映画では、「ナマ」のエースの声が総天然色の映画で報道され、

今や彼等は国民的役者として毎日の様に騒がれてた。

ニュース映画はこれまでと違い「総天然色」の映画。

しかも海軍報道部から発表された映画だから、価値が違う。

岩本と武藤は人気者となって、彼等が勤務してる厚木航空隊は平日でも若い男女が

つめかけ大騒ぎとなってた。

当然、世界にも彼等の名前は知られ、特にアメリカ陸海軍パイロットは彼等の愛機の特徴を

掴もつと躍起になってた。

「コレがジャップのエース、レップーコテツ、イワモトテツゾーか？そして隣が、ソラノミヤモトムサシ、ムトーカネヨシ・・・。どちらも強いパイロットらしいな。」

「見るよ。ジツャプの新聞を。F4Fの翼が粉碎されてる写真が掲載されてる。」

しかも鮮明でカラーだ。

何時の間にカラーを新聞まで使える様になったんだ？」

「我が軍のパイロットはすべてルーキーばかりだ。」

こんな強敵が居るのでは、彼等は確実に「的」にしかないだろ

う。

特にイワモトは40機も撃墜してるスーパーエースだ。」

「我が国のトップエースであるリッケンバーカー大尉の記録を既に塗り替えてるだって？」

しかも一年以内にはレッドバロンの記録も更新する・・・だろうって。

「

彼等は同盟国経由で取り寄せた帝國新聞を読み、何度もため息をつき、貴重な資料の

新聞を引き裂きそうになってた。

何せ、コチラのナマの情報は一切無い状態なので、敵の発表を見るしか、

正確な情報が入手できないのだ。

もちろん機密情報が掲載される訳もなく、おおまかな戦果や敵の動向程度だが、

それでも皆無よりはマシであろう。

敵の華やかさに比べ、我が国の惨めな事よ。

騙まし討ちで敵の戦艦を葬り、汚い国との印象と言われ、海軍に籍を置く家庭は卵を

投げつけられてるとか。

アメリカのツラ汚しと・・・。

有望な若者はすべて陸軍が官僚を目指し、海軍を志望する若者は皆無。

それでも兵士は必要なので、戦死した兵士の埋め合わせに刑務所囚を徴用したとか。

大丈夫か？

合衆国海軍・・・。

パールハーバー（後書き）

日米の比較日常編でした。

次回からはサイパン航空戦です。

グアム攻防戦（前書き）

グアム上空が激戦地となります。

グアム攻防戦

アメリカ機動艦隊が壊滅してしまい、我が合衆国海軍は完璧に本土に引き籠もっている。

代わりに活躍してるのが陸軍航空隊だ。

善戦とまでは行かないが、敵に少しは痛手を与えていると・・・思う。何せ撃墜報告が皆無なのだ。

だが進撃を止める訳には行かない。

合衆国が日本に対し攻撃を仕掛けた以上、戦争を止める事は出来ないのだ。

海軍が復活出来るまでは我々が合衆国を支えておく。

「隊長、今日もジャップは来ますかね。」

「確実に来るよ。ボビー。」

だがキツク言い渡しておくぞ。

機を壊されたら、迷わず脱出。

我々は経験のあるパイロットをこれ以上喪う訳には行かないのだ。

お前みたいないなルーキーでも、今や宝石よりも貴重なのだ。」

「分っております。隊長。」

本当に分っててくれるのか・・・。

昨日も彼の同僚のジョニー少尉が敵の餌食となり、グアムの空に消えたばかりだ。

彼等には経験が無い。

かく言う私も二週間前にグアム基地に着任したばかりだ。

初出撃は昨日。

運良く敵弾を食わずに着陸出来たが、今回も無事に着陸出来るか自

信が無い。

出撃まで何故時間がかかっているかって？

そりゃ戦場に慣れていないルーキーをいきなり空中戦に上げて食われて終わりだからよ。

司令部もパイロットの温存には最大の努力を払ってくれてる。

機の補充は本当に潤沢だ。

だが経験豊富なパイロットが居ない。

どうしてこうなったのだ……。

最近是我が軍の戦果を確認するよりは敵が発行してるテイコクニュースペーパーを

第三国経由で入手するのが現実となりつつある。

敵のパイロットはハードなベテランばかり。

見ろよ。

このテツゾー・イワモト少佐なんて、ジョン・ウエインバリの色男。これでジャップのトップエースだってんだからな。

我が軍にも彼みたいな人間が居たらいいのだが、現在居るのはルーキーばかり。

司令部も彼等が生き残って戦い続けてくれたら、絶対にエースになれると信じている。

現在開発中のリパブリック社のXP47は敵弾の防御がハンパでは無いらしい。

早く前線に出してくれないかな……。

重くてパワーの無いカーチスでは飛んでいるだけで地獄だ。

忘れていたが、私はグアム陸軍第211航空隊所属、ボビー・マッケンロー中尉だ。

今日の空襲を生き延びていたら、また皆と会おう。

その日の空襲でボビー中尉の乗るP40はグアムの海に撃墜され、彼は二度と土を踏む事は無かった。

「加藤中佐、今日もグアムの海上で敵を待つのですか？」

「ウム、我が軍の戦闘機が万一撃墜されたら機密が漏れる恐れがある。

抛って空中戦は必ず海上上空で行う事。

脱出する際は必ずパラシュート索を繋いで脱出せよ。

諸君が脱出後、君達の愛機は自爆する様になつてる。」

ここはサイパンアスリート基地。

彼等は元陸軍パイロットの飛行集団。

ようやく航法の教育が終わり、前線に配備されたばかりだ。

彼等の愛機は飛燕21型。

実史の飛燕とは違い、エンジンはマリンエンジン。

キャノピーはバブルキャノピーで視界はバツグンである。

翼は層流翼。オマケに飛燕の特徴である翼をスライド出きる構造になつてる。

重心位置の調整も簡単だ。

キャブレター形式からインジェクションに変更されたので、空中機動で失火する事も無くなり、

機動性はゼロ戦とタメを張れる程になつた。

余談だがイギリスのスピットファイヤーも飛燕のコピーで採用。

航続距離もドロップタンク無しで2000km、タンク装備で3000は飛べる。

未だに平和な欧州だが、ソ連の動向が怪しいらしい・・・。

同盟国となつたドイツは現在警戒態勢に入つてる。

だが太平洋戦域でアメリカが負け続けてるため、開戦には至っていない。

0700。

今日もサイパンのアスリート飛行場では多くの飛燕が列線を作り、待機してた。

「本日の攻撃指揮官はこの加藤が勤める。

攻撃目標はグアムの敵戦闘機隊だ。

襲撃予定時刻は0900。

編隊は崩しても構わないが、小隊は絶対に崩すな。

特に三番機。

小隊長の管制を無断で離れた場合は帰還出来ても搭乗配置から降ろす。

分ったな？」

各分隊に所属する三番機のルーキーは緊張した顔で「ハイ。」と言
うしか無い。

現在の彼等にはハイしか答える術は無いのだ。

生き延びて、カモ番になるのが彼等の最大の目標。

そのためには、情けなくても小隊長の庇護を離れる訳にはいかない
のだ。

「時刻整合を行う、0745まであと十秒、五秒前。

時間。0745。

では出撃開始は0820だ。各自愛機の点検をしておけ。」

パイロットは加藤に敬礼を行い、解散する。

サイパンからグアムまでの距離はわずか200km弱。

途中のロタ島は日本が確保してるが、ココには部隊はレーダー以外駐屯してない。

アメリカもロタ島を占領しようとはしてたが、常に戦闘機の傘があるため、
上陸軍を派遣出来ないのだ。

0830にアスリートを離陸。

巡航速度400kmの飛燕ではジャスト0900にグアム近辺の海上に到達する。

グアムからは多くの戦闘機が・ヨタヨタと舞い上がってる。

彼等も必死なのだが、テクニクと経験が無いパイロットばかりなので仕方ないのだ。

だが敵襲ならば上がらない訳にはいかぬ。

加藤は彼等が離陸するのを悠々とした態度で眺めてた。

部下には敵が上がるまでは攻撃するなと厳命してある。

配下の部下は黒江、安田、若松と言う陸軍時代の部下ばかりだ。

Gさんには感謝してる。

彼等をすべてワタシの配下に入れてくれたからな。

おかげで部下の掌握も苦労せずに済む。

それにしても海軍の戦闘には呆れる位、先進的だった。

陸軍の場合は空を飛んで戦って着陸までが仕事だが、

海軍には航法、燃料管制と言う仕事まで加わるのだ。

陸軍も管制はしてたが、適当なモノだった。

だが海軍は海の上を飛ぶ関係上、燃料管制は大切な仕事だ。

タンクの残量を表す計器も精密に作られてある。

おかげで正確な残量も分る。

ああ、ようやく敵も離陸が終わり我々に立ち向かって来てくれる様だ。

話は帰還してからにしよう・・・。

加藤を始め、サイパンの狼達に拠る狩りの時間が始まった。

グアム攻防戦（後書き）

サイパン グアムは僅か210km 離れていません。
ルークーにはそれでも相当の遠距離に感じます。

ようやく陸軍関係者を出しました。

彼等は飛燕で戦って貰います。

欧州もそろそろ危険になりつつあります。

アメリカの苦悩（前書き）

別作も終わりましたので、しばらくは本作に集中します。
趣味に走りますがお許しを。

アメリカの苦悩

アメリカ側は窮地に落ちてた。

特に海軍は健軍以来の窮地と呼んで良い。

歴史上でも最悪の敗北を喫したのだ。

あのアドミラル・トーゴーが行ったニホンカイカイセンでもココまでの敗北では無かった。

あの時は生き残りも居たのだから。

しかし今回の敗北は我がグアム基地の面前で行われたのに、完膚なきまでの・・・。

大敗北。

まさに完敗。

キンメルは戦死したが、それで良かったと思う。
名誉の戦死扱いで終われたのだから。

生きてたら間違いなく更迭されていただろう。

後任にニミッツが就いたが、彼も弱りきってる。

指揮する兵士も艦隊も無いのだ。

私だってどうしようもなくなる。

現在、大西洋艦隊を太平洋に回し、当面を凌ぐ事にしたが、兵士も足りなくて困ってた。

だが今回の敗北を国民が知るや、海軍の地位はどん底に落ちてた。

海軍軍人の留守家庭は嫌われ者として町内会から外され、軍人も外出する際は私服で

出かけないと卵を投げつけられる始末だ。

彼等が悪い訳でも無いのに・・・。

このままでは海軍が終わる。

その危機感から大統領も各地の工廠を叱咤し、建艦を急ピッチで進める。

駆逐艦や軽空母は既に配備可能となってたが・・・。

「人がいねえええ。」

この一言である。

兵器や船、戦闘機や爆撃機は使える人間が居て初めて兵器として役立つのである。

それなのに、先の海戦でアメリカ海軍の将兵は半減以下となっってしまった。

特に戦闘艦、航空機パイロットは払底していると断言しても良いレベル。

陸軍からパイロットを融通して貰おうとしたら、パイロット側が拒否。

海軍に移籍したら妻から離婚されるとか、勘当するとか言われ、全員拒否されたのだ。

これは・・・。
最悪だ。

海軍の危機もココまで来ると救いようが無い。
どの様にしたら良いのだろう・・・。

士官学校の学生を繰り上げ卒業させようとしたが、彼等の半数は自主退学してしまってたのだ。

前回の敗北で海軍に絶望したとかで・・・。
残りの生徒はすべて札付きの連中ばかり。

正直、もう後が全然無い。
弱ったルーズベルトは国民に謝罪し、海軍が悪いのでは無い。

自分が無謀な戦いを仕掛けさせたのがそもそもの原因。
大戦が終了したら自分は辞任する。

どうか海軍に協力してくれ・・・、とアメリカ全土に放送したのだ。
さすがにココまで言われたら、協力するべきとの雰囲気も出て、陸

軍パイロットは

海軍に転出。

退学した士官学校の生徒も復学。

ゴロツキは兵士として志願。

何とか形だけは海軍の形を取り戻した・・・かに見えた。

だが、海軍の運用は数ある軍隊でも一番難しい運用。

船を走らせるのも技術が必須。

大砲をブツ放すのも陸で撃つのは訳が違うのだ。

再起動を始めたアメリカ海軍の前途は多難なのだ・・・。

その頃のG・・・。

「長官、スパイの報告に拠るとアメリカ海軍の地位はどん底らしいですよ。」

「オレがアメリカ海軍の兵士だったら、脱走したいと絶対に思うからな。」

まさかココまで負けてしまつとは・・・。」

「兵士こそが撃つべき敵の最大兵器なのですよ。」

兵士が居なかつたら、船は動かぬ、飛行機は飛ばぬ、鉄砲は撃てぬ、メシは作れぬと

最悪の悪循環です。

今、アメリカはその負のスパイラルにハマリ込んで抜けられなくなっています。」

「ヤツ等が根を上げるまでは、手を緩めるでは無いぞ。」

「モチロンです。ですが、長官。長官も身辺には注意して下さい。前世の長官は前線を視察してて撃墜されたのです。」

「アレが我が国でも最大の海軍甲事件として後世まで問題となっていました。」

「特に重要な用件は使い捨ての一回限りの暗号をお願いします。」

「分っておる。オレも日本の武器の一つだからな。」

「その通りです。生きて最後まで奉公してくださいよ。」

「Gもだぞ。お前の情報があったから今があるのだ。」

「分ってます。お互いに前線には絶対に出ないで、内務で戦いましょう。」

「ウム。」

Gと高野は今後の方針を話し合い、前線を指揮している同僚の柴田や淵田に連絡をした。

忘れてましたが、柴田は海軍戦闘隊総司令部勤務。

淵田は爆撃隊総司令部勤務です。

さすがに重爆は専門の司令部が必須となっていたので、淵田は重爆部隊を指揮してもらっています。

アメリカの苦悩（後書き）

日米の苦悩を書きました。
次回からまた戦闘に入ります。

奇襲（前書き）

アメリカが起死回生の奇襲攻撃を行います。

奇襲

アスリート飛行場が奇襲を受けたのは夜も明け切らぬ明け方の事だった。

レーダーは作動してたのだが、管制官が居眠りをしてたのだ。

おかげでアスリート飛行場は火の海となり、多くの戦死者を出してしまった。

幸いにもパイロットだけは難を逃れたが・・・。

彼等は万一の際に絶対に助かる様に、宿舎は飛行場から離れた地下のコンクリートに
囲まれた宿舎に寝泊りしてたのだ。

航空機は喪われたが、パイロットが助かっただけでもヨシとするべき。

だが、この攻撃で微妙なバランスが一時崩れてしまった。

「Gよ、アスリート基地が奇襲を受けたそうぞ。」

「予想はしてましたが、思ったよりは早かったですね。」

「・・・冷静だな。どうしてだ？」

「敵さんも命がけなんですよ。前世でも長官の提案で行ったパールハーバー奇襲で

受けた損害に対する報復攻撃として、B25を空母に搭載、東京その他を空襲しています。」

アメリカは舐めたら大怪我をさせられる手ごわい国なのですよ。」

「ならどうして敵地を取らない？」

「取つても維持出来ません。それに陸軍に増長されるのは好ましくありません。」

「お前の陸嫌いも相当なモノだな。」

「前世の陸軍が本当の役立たずの極潰しでしたから。」

まあ今の陸助ではロクな事は出来まい。

予算も人も信頼も無いのだからな。

海軍も万能では無いが、占領政策は取っていないので、大丈夫だろう。

サイパンの奇襲は痛かったが、空母を派遣し、基地の復興が出きるまでは、

空母艦隊を貼り付けておこう。

これで大丈夫だと思う。

アメリカ陸軍は空母が派遣されるや、連日の如く爆撃機や戦闘機を派遣したが、

下手糞パイロットの比率が70%を超えてる現状では、洋上を動く艦艇の

撃沈などと言う芸当は不可能なのだ。

ましてや鬼の坂井、太平洋のリヒトフォーヘン笹井、烈風虎轍、空の武蔵と言う

剛剣みたいなパイロットが揃ってる空母部隊には一步も近寄れずに居た。

被害ばかりが上昇してたが、それでも戦果が皆無と言う事は無かった。

そう。。。

一番機の管制を離れてしまった三番機を食われる事態が起きてるのだ。

特に二番機から一番機になったばかりの編隊の三番機がカモにされる。

敵のパイロットも生き残りが増えて来たのかも知れない。

「マツカーサー長官、被害は相変わらず多いのですが、戦果もボチボチとですが、

上昇して来ました。レップウを三機も撃墜しています。」

「昔ならたかが三機と言ったかも知れぬが、ルーキーばかりの我が軍のパイロットが戦果を上げれる事自体が素晴らしい。

特にレップウには煮え湯を飲まされているからな。

その戦果を上げたパイロットを連れて来い。

彼等をねぎらってやる。」

「・・・長官、その戦果を上げた彼等ですが、着陸時に車輪を折り、機が炎上。重症を負っております。

戦果はガンカメラで確認しました。コレです。」

見ると確かにレップウに射撃を放ち翼をへし折ってる映像が残されてた。

その代償が我が身の重症になるとは・・・。

「・・・分った。彼の容態が落ち着いたら本土に帰還させ、退院後は本土の教官に回せ。

例え一機でも撃墜出来た彼は我が軍の英雄だ。

丁重に治癒し、本土に送還させる。」

「アイアイサーです。」

今まで戦果皆無だったアランことレップウを撃墜した彼は、どんな
宝石よりも貴重な存在だった。

何としても助け、経験を後輩に伝えて欲しい。

二週間程経過すると、彼は輸送に耐えられる程度までは回復出来た。
本土に移送し、本土の病院で集中治療をする事になる。

ああ、彼の名は・・・「リチャード・アイラ・ボング少尉」だ。

輸送指揮官には丁寧かつ慎重な操縦で彼を送る様に言明してある。
早く元気になってくれよ。ボング少尉、いや中尉か・・・。

彼は功績に抛り進級してたのだ。

アスリートの悲劇から約一ヶ月。

機動部隊が張り付いてたおかげで、飛行場施設は前以上に充実。

母艦部隊のパイロットもそのままアスリートに赴任し、アスリートは
世界最強の戦闘機部隊となった。

数日、ルーキーの三番機が食われる被害が出たので、しばらく三
番機には

ベテランのみを充て、ルーキーは空中戦圏外から見学のみとしてた。
周囲はベテランで固めてあるので、敵も近寄れず空中戦指揮官はル
ーキーのお守りから

開放されたので、思う存分活躍出来た。

食われるルーキーも皆無なので、撃墜報告のみの日がしばらく続い
てた。

そんなある日・・・。

「加藤隊長、大変です。」

「どうした・・・。」

「遂に敵の新鋭機が出現しました。」

「P51か？それともP47か？」

「P47サンダーボルト．．．と思います。丸太みたいな巨体にハイパワーエンジンを搭載。とにかく頑丈らしいです。」

「予想出来た事よ。装甲板はどの程度だ？」

「恐らく20ミリは跳ね返すかと．．．。」

「フム．．．では改マウザー砲にそろそろ更新するか。」

アレは口径こそ20ミリだが貫徹力は25ミリに近い威力を持つ。坂井、整備兵に命じすべての烈風の機銃を改マ砲に更新する様に命じる。」

「了解しました。」

遂にP47が出てきたか．．．。

この調子だと歴史よりも早くF6FとかP51も出現するだろう。

まあ予想はしてるから慌てる事は無いがな。

早く敵のパイロットを枯渇させないと．．．。

何時までもアメに構ってるヒマは我が帝國には無いのだ。

口助も居るしな．．．。

加藤は考えをまとめると無電室に向かい内地に使い捨て暗号の送信を命じた。

内容は．．．。

「ブタ、ダツソウ。」

P 47 出現時に備えて作られてた暗号である。

奇襲（後書き）

アスリートが奇襲を受け、一時壊滅しました。
敵も必死です。

ボングは重症を負いましたが助かります。
負傷の度合いは杉田がラバウルで撃墜された時と同程度です。

コルセア（前書き）

第一のライバルとなるコルセアが登場します。

コルセア

Gです。

遂に第一の難敵、リパブリックP47サンダーボルトが登場しました。

後世の評価はあまり高くないサンダーボルトですが、とにかく頑丈で地上攻撃には、ムスタング以上の破壊力があります。

運動性能は良く無いのですが、頑丈で事故も少ないのでルーキーでも生き残る事が可能です。

航続距離はあまり長く無いのですが、グアム サイパン間程度なら問題は無いでしょう。

一時被害が出てた烈風部隊ですが、編成を変え、ルーキーは高高度から戦闘を見学するのみに

徹する様になってから、被害は皆無となりました。

何故見学させるかって言いますと、戦闘に入れば機動に付いて行けなくなるからですよ。

ルーキーは・・・。

そしたら力モにされてしまいます。

今後は新任隊員は二ヶ月、絶対に迎撃には加えず、高高度からの空中戦見学。

頃合を見て三番機に登用とする事にしました。

サンダーボルトですが、かなり装甲が頑丈らしく、実史のサンダーボルト以上の

装甲を持つらしいです。

20ミリでも十数発は大丈夫と言いますから相当の装甲です。

急遽、飛燕と烈風のマウザー砲を改マウザー砲に更新し対応しました。

葉莖が長くなり破壊力が純正マウザー砲よりも倍近く上がったいます。

B29でも二撃も撃てば撃墜可能と判断しています。

コレならバルカン砲を出すまで充分でしょう。

ココはアスリート飛行場。

今や世界の注目の戦場だ。

独逸や英吉利の観戦武官が多く詰め掛け、空中戦を視察している。

彼等の住む欧州は今も平和だが、何時、ソ連が行動を起こすかも分らない。

そのためには少しでも戦訓を貯めておきたいのだ。

ドイツのガーランドや両足義足のダクラス・R・S・バーダー。

アドルフ・マラン。ヴァルダー・ノボトニーと言った後の時代のエ

ースは、

熱いサイパン上空の大空を見上げ感嘆の声を上げてた。

「凄い機動性だ。それにしてもあの指揮官の判断は素晴らしい。

攻め易い所から切り崩し、敵の兵力を斬滅している。

汚いと言うヤツも居るだろうが、戦闘機の空中戦指揮官としては満点だ。」

「私も同意です。ガーランド少佐。我が軍の戦闘機の指導をお願いしたい位ですよ。」

「それにしてもアメリカの新鋭機はかなり頑丈ですね。

我が国から輸出してるマウザー砲を食らえば、爆撃機でも持たないのに。」

二十発は食らってましたよ。今の攻撃は。」

「ノボト二一大尉、素晴らしい視力と観察眼ですね。この距離で分りますか？」

「戦闘機パイロットは視力だけでは無いと思います。第六感とも言える霊能力に近いカンが必須ですよ。」

我が軍はまだ戦闘経験はありませんが、日本軍の戦訓を元に、視力以上の戦闘カンを鍛えています。」

万一口助と戦う日が来たらお見せできると確信していますよ。」

「ロシアもきな臭いですからね。日本が強敵だから未だにシナにも欧州にも侵攻をかけてませんが、少しでも緊張を解くと・・・。」

「攻めて来ますね。確実に。」

観戦を続ける彼等の目は真剣であった。

上空では大空をバツクに日米双方の若者が死の舞踏ダンスを続けてた。

白い飛行機雲を両翼から引き、顔のホツペは垂れ下がり、眼球は眼骨の奥まで沈む。

好きな女性には絶対に見せたく無い様相となってるのだ。しかし彼等にはそれに構う余裕も無い。

命を懸けた空中戦なのだから。」

「隊長、敵の一番機はかなり腕が良いヤツみたいですよ。先ほど4中隊の二番機に弾を食わせていました。」

「見てた・・・お前等、全員援護に回れ。オレが食う・・・。」

坂井は彼等にそう告げると、単機で敵に挑んで行く。敵はF4Uコルセア。

初期からグアムに駐留してたが、最近ようやく出撃する様になったのだ。

パワーはあるが、ルーキーには取り扱いが難しい機体と見た。

坂井は愛機烈風21型甲（改マウザー砲搭載により形番が変わりました。）の翼を翻すと、

見事な機動でF4Uに接近。まずはルーキーと思しきコルセアを食う。

すると一番機が坂井に気づき急降下を仕掛けて来た。

F4Uに乗る彼の名はバグ・サザランド大尉。

アメリカ本土の教育部隊に居たため、壊滅を免れたベテランであった。

「チクショー、グアム海戦にオレが居たら、あそこまで無様な敗北は無かっただろうに。

いいか、ルーキー諸君。

戦闘は食い易い敵から食うのだ。

諸君がベテランに挑んでも撃墜されて終わり。

まずはルーキーと思われる連中から食う。

間違ってもドッグファイトは挑むな。

二撃は考えず、一撃離脱に徹して戦え。」

バグは隊員を必死に指導してたが、彼等も戦闘に入ると頭に血が上ってしまい、

やがてアランに食われ二度と基地の土を踏む事が無かった。

バグは少しでも敵を撃墜しようと、相手を見定め攻撃を繰り返してた。

しかしアランもP47並に頑丈で防弾が行き届いてた。

それに加え恐ろしく弾道性の高いキャノンも装備。
ベテランのバグと言えども、アランは難敵であった。
そんな彼にも死の影が近づいていたとは気づかなかった……。

「バグ隊長、助けてください。凄いアランに……。」

部下のマック少尉から救援の無電が入り、途絶したのだ。

「マック、返事しろ。マック……。ダメか……。」

眼下を見下ろすとマックと思いきF4Uが翼をへし折られ真っ逆さまに墜落する所を目撃。

バグはマックの仇を取ろうと、アランの元に急降下をかけた。

そして攻撃寸前……。

アランは気づいていたのか、バグの射線をズラすためか、翼を翻しドッグファイトを挑んで来たのだ。

「クッ、気づかれてたか。」

それにしても良い機体だな。アランは。

ドッグファイトにも強そうだ。」

F4Uのコックピットでバグはアランを睨みつけ、視察を続けてた。だが今までのアランとはケタが違うパイロットが操縦してる事まではバグも

気づいていなかったのだ。

「な、何だ。あのアランは……。」

旋回半径の取り方が今まで見たアランとは違いすぎるのだ。グイグイと左旋回でバグの乗るF4Uにアランは食い込む。

「グツ、不味い。このままでは食われる。」

バグは旋回を止めダイブで逃げようとした。

アランが狙ったのはその旋回が止まる瞬間だったらしい。

彼は落ち着いて接近し、バグのコルセアの翼を一連射で砕いたのだ。

「チクシヨ、食われた。コチラバグ。脱出する。」

バグはSOSを送信するとすぐさまキャノピーを飛ばし脱出にかかった。・が。

敵は見逃してくれなかったらしい。

バグは次の射撃で愛機諸共サイパン沖に消えたのだから。

「フー、中々手強い敵だった。

コチラ坂井一番。敵の凄腕を撃墜。」

坂井は基地に通信を入れると次の敵を求め翼を翻して行く。

地上では、彼等の奮戦を手に汗握り独英の武官が見学してた。

「凄いドッグファイトだった。彼の名は何と言うのだ?」

「サブロー・サカイ中佐です。」

「おお、彼がエースの一人、サブロー・サカイか。

素晴らしいドッグファイトでした。今の映像も世界に公開しますよね。」

「もちろんです。」

彼等はエースのガンカメラに映る無慈悲な空中戦に息を呑み手に汗を握り締め

見れる日を楽しみにしてた。

バグ・サザーランド大尉、サイパン沖にて戦死。

コルセア（後書き）

坂井とサザランダの戦いでした。
実史とは違い戦死させましたが、
凄腕パイロットは確実に仕留めるが日本軍の鉄則となっています。
烈風の形式を甲、乙で変更します。
三田様、ありがとうございます。

復活???アメリカ太平洋艦隊(前書き)

敗北から一年。

ようやくアメリカ太平洋艦隊が復活しました。
形だけは・・・。

復活???アメリカ太平洋艦隊

ニミッツはようやく司令長官としての任務に就いた気がした。

グアム沖からの敗北から一年。

攻撃は陸軍航空隊と海兵隊のF4Uがサイパンとグアム双方で迎撃
侵攻作戦を

行うのみであったのだ。

船が無いので、日本側に攻める事も出来ない。

日本が二千年もの間、敵に侵略されなかったのは四方を海に囲まれ
てたからだ、

我々は今、ようやく実感してた。

我がアメリカ合衆国も膨大な国土はあるが、

太平洋と大西洋に挟まれ、両方の海を艦隊で守らないといけない。

艦船の製作にはパナマ運河の幅を超えてはいけないと言う制約もある。

だが去年のグアム海戦に拠り、両洋艦隊の片翼は叩き折られてしま
った。

あれから一年・・・

ようやく戦艦5隻、空母7隻を含む艦隊を作り上げたのだ。

当初は戦艦は新たに作らない方針だったが、昨年の完敗は戦艦の威
力を世界に見せ付けた。

我々の敗北ながら、戦艦には未だにバカに出来ぬ威力が隠されてた
のだ。

我々は数百人の犠牲者を出し、艦載砲の威力を高める技術の開発を
続けた。

あの時の海戦での射撃距離は実に45000メートル。

観戦してたB17の証言は信用に値すると判断され、

それ以上の距離を撃てる砲の製作にアメリカ合衆国は技術の研究に苦心した。

そして、ようやく艦載砲も完成。

口径46センチもの大口徑砲が完成した。

ただし当初予定していたアイオワクラスでは搭載が不可能と判断され、パナマ通過を諦め、

太平洋専属として配備する事になったのだ。

彼女の名前は「モンタナ」と呼ばれる事に決定。

モンタナクラスは後にヤマトクラスを凌駕する世界一の戦艦となったのだ。

あのグアム海戦では、信じられない距離を敵は戦艦で撃ち、我が軍を壊滅させた。

あの屈辱と羨望は永劫に忘れる事は無いだろう。

世界の海軍はアドミラル・トローゴの再来とアドミラル・オザワを信望してた。

我が海軍士官も彼の様な指揮官になりたい……。

屈辱だが、私も心底、オザワが眩しく見える。

嗚呼、このモンタナがグアム海戦時に登場してたら……。

我が軍は惨めな敗北を喫する事も無かつただろう……。

「長官……。」

「ん?? ああ、キミかね。」

いや、ようやく合衆国海軍らしくなったなと思って……。」

「ムリもありません。」

昨年の敗北で我が海軍は壊滅的打撃を受けました。

我が合衆国で無かつたら、アレで講和してたと思います。

しかし苦節一年でようやく……」

「ウム。見たまえ。」

この頼もしき彼女の雄姿を……」

後にモンタナクラスと呼ばれる一番艦、戦艦モンタナの巨体に我々は見とれてた。

もうパナマ通過なんてどうでも良い。

我々は世界一の大戦艦を保有出来たのだから。

この八万トンの巨体の前にはどんな国もひれ伏すだろう。

だが敵はあのニホンテイコクだ。

どんな手を使うか予想も出来ない。

ヤツ等は今年のグアム沖海戦の勝者なのだからな。

ニミッツはモンタナのブリッジに立ち、身震いしてたのだ。

Gです。

スパイの報告に拠りますと、いよいよモンタナクラスが就役したとか……。

ま、予想通りですね。

しかし一年で作り上げるとは日本では真似出来ません。

でもアメリカの国力でも一年で艦隊を作るのは相当のムリをしたでしょう。

もう後は無いと思います。

フフフフフ。

自分はコレを狙ってたのですよね。

いかなアメリカでも二度も艦隊を壊滅させられたら……。

国民は絶対に黙っていません。

我が国は他国には一切の手出しはしてませんからね。

世界も好意的だと思います。

さて、次の作戦を打ち合わせておきますか・・・。

復活???アメリカ太平洋艦隊(後書き)

短いですが、次の戦闘の前兆を書きました。
いよいよ講和目指し、Gが暗躍します。

モンタナ出撃（前書き）

アメリカ海軍の誇り、モンタナがデビューします。

モンタナ出撃

膨大な国費を投じて建造してた戦艦モンタナクラスのネームシップ。BBモンタナがついに実戦へと参加する。

モンタナクラスは5隻。

戦艦モンタナ、アイオワ、ミズーリ、ニュージャージー、ウイスコンシン。

すべて46センチ主砲三連装を三門搭載。

排水量は八万トンを超える世界最強の戦艦だ。

空母は戦前から設計が進められてたエセツクスクラスが七隻。

満載排水量就役時：34,500 t、36,380 t

全長270m、速力33ノットを誇る最新鋭空母だ。

アメリカ中の新聞社を呼び、新鋭艦隊の概ねの概要を発表。

もちろん機密は封印してるが、大きい、強い、速いと言う表現だけは使ってる。

もちろん世界一の戦艦とも。。。

少しでもアメリカ海軍の信用を上げるためには必須なのだ。

艦隊建造のため、アメリカの国債発行額は至上最高に達してる。

この艦隊が壊滅したら、もう二度とアメリカには海軍が作れない可能性も高い。

しかし、この強大な彼女達が滅びるとは。。。

夢想も出来ないのだ。

モンタナの出撃は世界各地のメディアにも派手に報道し、

日本帝國海軍よ、モンタナがグアム海戦の仇を取ると威嚇報道をしたのだ。

そして恨みのグアム沖で待つと。。。

当然、日本側もモンタナを討つべく、柱島を出撃。ただし、機密の部隊も秘密裏に硫黄島に進駐してたのだ。彼等の進駐は、アメリカも世界も知らなかった。

日本側の司令長官は、小沢治三郎。

今や日本海軍の柱として世界に知られてる。

次席司令長官は山口多門。

機動部隊を率いたら世界一との評価。

そして山口機動部隊には、グアム攻防戦で多くの敵を撃墜したトッブクラスの

エースがすべて召集されてた。

戦闘機集団最高飛行隊長に加藤健男少将。

各空母の飛行隊長もトッブクラスのエースばかりだ。

空母信濃飛行隊長、坂井三郎、大鳳飛行隊長、岩本徹三。

赤城飛行隊長、武藤金義。加賀飛行隊長、笹井醇一。

蒼龍飛行隊長、西澤広義。翔鶴飛行隊長、黒江保彦。

瑞鶴飛行隊長、若松幸禧。飛竜飛行隊長、菅野直。

いずれも撃墜30機は超えている世界のエースばかりだ。

彼等の部下も全員が彼等を追い越せと撃墜レースに加わってる兵ばかり。

しかし彼等も今回の海戦では、敵を誘き寄せるエサ代わりなのだ。

日本は負けて無かったから、これだけの陣容が揃えられたが、もし一度でも

敗北を喫してたら、これだけの陣容が揃わなかっただろう。

海戦の勝敗は国の浮沈にも関わってるのだ。

小沢も山口も勝者の驕りは全く無い。

あるのはいかにして勝つか？だけだった。

戦艦同士の実力ならアメリカの勝ちは確実だろう。

特にモンタナの主砲は射程が五万は飛ぶと言う話だ。

だが日本側は戦艦同士のバトルは前回の海戦が最後だったと認識し

てる。

大和も武蔵も今回はエサでしか無いのだ。

彼等は今回の海戦でアメリカの戦争追行能力を根絶させようと考えてる。

いかな強大なアメリカの国力でも膨大な国費を注ぎ込んだ艦隊を二度も喪失したら。

再び立ち上がる事は不可能と考えてる。

大統領がいかに戦争を続けたいと考えてても国民が納得しない。

最悪、暴動が起きると考えられてる。

それに海軍兵士が枯渇するハズだ。

陸軍兵士と違い、機械に囲まれる生活が続く海軍兵士は、

特殊な訓練と長い実務経験が必須なのだ。

特に前回の海戦ではその兵士のすべてを喪つと言う愚作も犯してる。二度目となったら、アメリカ海軍の存在自体を国民が許さなくなるだろう。

現に去年の敗北直後は留守兵士宅が村八分にされ、士官学校生徒が大量退学。

あげくには犯罪者を兵士として雇用せざる負えない事態も起きてる。コレで負けてしまったら、およそ予想出きる更に斜め上の事態となるだろう。

そしてそれは現実の事態となるのがほぼ確定してるのだ。

敵は確実に来る。

そしてそれ等は確実に殺れる必殺兵器も完成してるのだ。

アメリカは自分の足で死刑執行の場に足を進める囚人になってるとも知らず、

大艦隊と共にグアム沖に向かった。

日本側は敵をおびき出す「エサ」としてのみ動き出したとも知らず。

クケケケケケケ。

アメリカ海軍の末路がいよいよ始まった。

戦闘機パイロットはルーキーばかり。

そして兵士は罪人や下手糞ばかり。

さて新鋭艦と言う兵器をどう扱い、逝くか・・・。

楽しみですね。ホホホホホホ。

Gはアメリカ海軍が出撃を報じるニューヨークタイムズを楽しそうに眺め、

高野と共に大笑いしてたのだ。

モンタナ出撃（後書き）

次回は恨みのグアム沖です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303y/>

G海軍航空隊

2011年12月30日01時51分発行